may 14		£ / PTQ/SB/2.1 (59-04)		
		Approved for use through 07/31/2006. OMB 0651-0031 atent and Trademark Office; U.S. DEPARTMENT OF COMMERCE ection of information unless it displays a valid OMB control number.  09/752,837		
TRANSMITTAL FORM	Filing Date First Named Inventor Art Unit	12/28/2000 Nobuyuki YAMAUCHI et al. 2114		
(to be used for all correspondence after initial filing)  Total Number of Pages in This Submission	Examiner Name  Attorney Docket Number	Dieu Minh T. LE 44471/251413		
ENCLOSURES (Check all that apply)				
Fee Transmittal Form  Fee Attached  Amendment/Reply  After Final  Affidavits/declaration(s)  Extension of Time Request  Express Abandonment Request  Information Disclosure Statement  Certified Copy of Priority Document(s)  Reply to Missing Parts/ Incomplete Application  Reply to Missing Parts under 37 CFR 1.52 or 1.53	Drawing(s)  Licensing-related Papers  Petition Petition to Convert to a Provisional Application Power of Attorney, Revocation Change of Correspondence A Terminal Disclaimer Request for Refund CD, Number of CD(s)  Landscape Table on CD	Other Enclosure(s) (please Identify below):  Transmittal of Certified Copies of Priority Documents JP  11-375859 and JP 2000-396112		
SIGNATURE OF APPLICANT, ATTORNEY, OR AGENT  Firm Name  LOLIDATED OLIC OTTO OLIC TO ALL LED				
Signature KILPATRICI	K STOCKTON	I LLP		
Printed name Brenda O. Holmes				
Date 11.04.	300 4 1	Reg. No. 40,339		
CERT	TIFICATE OF TRANSMISS	ON/MAILING		
I hereby certify that this correspondence is being first class mail in an envelope addressed to: Com the date shown below:	nmissioner for Patents, P.O. Box 14	150, Alexandria, VA 22313-1450 on		
Signature	William			

This collection of information is required by 37 CFR 1.5. The information is required to obtain or retain a benefit by the public which is to file (and by the USPTO to process) an application. Confidentiality is governed by 35 U.S.C. 122 and 37 CFR 1.11 and1.14. This collection is estimated to 2 hours to complete, including gathering, preparing, and submitting the completed application form to the USPTO. Time will vary depending upon the individual case. Any comments on the amount of time you require to complete this form and/or suggestions for reducing this burden, should be sent to the Chief Information Officer, U.S. Patent and Trademark Office, U.S. Department of Commerce, P.O. Box 1450, Alexandria, VA 22313-1450. DO NOT SEND FEES OR COMPLETED FORMS TO THIS ADDRESS. SEND TO: Commissioner for Patents, P.O. Box 1450, Alexandria, VA 22313-1450.

Date

Wilkins

Typed or printed name

**Patents** 

#### ? IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re A	Application of:	)	
Nobu	yuki YAMAUCHI et al.	) ) ) Art Unit: <b>2114</b>	
Applio	cation No. <b>09/752,837</b>	) ) Examiner: Le, Dieu Minh T.	
Filed:	December 28, 2000	)	
For:	Information Processing Apparatus Defect Analysis Program, Defect Analysis Method, and Application Program Development Assistance System	) ) ) Attorney Docket No.: 44471/251413 )	
		I hereby certify that this correspondence is being deposited with the United States Postal Service as certified first class mail in an envelope addressed to: Commissioner for Patents, P.O. Box 1450, Alexandria, VA 22313-1450 on 11/04/04.	

### TRANSMITTAL OF CERTIFIED COPIES OF PRIORITY DOCUMENTS

Commissioner for Patents P.O. Box 1450 Alexandria, VA 22313-1450

Sir:

Submitted herewith are certified copies of the priority documents for the referenced patent applications: JP2000-396112 and JP11-375859.

Respectfully submitted,

Janie Wilkins

Brenda O. Holmes Reg. No. 40,339

Kilpatrick Stockton LLP 1100 Peachtree Street, Suite 2800 Atlanta, Georgia 30309 (404) 815-6500

KS File: 44471/251413

## 日本国特許庁

PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 Date of Application:

2000年12月26日

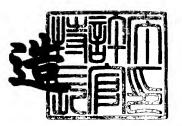
出 願 番 号 pplication Number:

特願2000-396112

東芝エルエスアイシステムサポート株式会社 株式会社東芝

2001年 2月 9日

特許庁長官 Commissioner, Patent Office 及川耕



CERTIFIED COPY OF PRIORITY DOCUMENT 出証番号 出証特2001-3006357

**BEST AVAILABLE COPY** 

# PATENT OFFICE JAPANESE GOVERNMENT

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

Date of Application: December 26, 2000

Application Number: P2000-396112

 $Applicant (s): \ TOSHIBA \ LSI \ SYSTEM \ SUPPORT \ KABUSHIKI \ KAISHA$ 

KABUSHIKI KAISHA TOSHIBA

February 9, 2001

Commissioner,

Patent Office

Kouzou OIKAWA

Number of Certificate: 2001-3006357

【書類名】 特許願

【整理番号】 46B007087

【提出日】 平成12年12月26日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 G06F 11/32

【発明の名称】 情報処理装置、不具合解析プログラムを格納したコンピ

ユータ読み取り可能な記憶媒体、不具合解析方法、及び

アプリケーションプログラム開発支援システム

【請求項の数】 20

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株式会社東芝

マイクロエレクトロニクスセンター内

【氏名】 澤岡 明

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株式会社東芝

マイクロエレクトロニクスセンター内

【氏名】 山内 信之

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県川崎市幸区堀川町580番地 東芝エルエスア

イシステムサポート株式会社内

【氏名】 松本 奈津美

【特許出願人】

【識別番号】 598010562

【氏名又は名称】 東芝エルエスアイシステムサポート株式会社

【特許出願人】

【識別番号】 000003078

【氏名又は名称】 株式会社 東芝

【代理人】

【識別番号】 100083806

【弁理士】

【氏名又は名称】 三好 秀和

【電話番号】 03-3504-3075

【選任した代理人】

【識別番号】 100068342

【弁理士】

【氏名又は名称】 三好 保男

【選任した代理人】

【識別番号】 100100712

【弁理士】

【氏名又は名称】 岩▲崎▼ 幸邦

【選任した代理人】

【識別番号】 100100929

【弁理士】

【氏名又は名称】 川又 澄雄

【選任した代理人】

【識別番号】 100108707

【弁理士】

【氏名又は名称】 中村 友之

【選任した代理人】

【識別番号】 100095500

【弁理士】

【氏名又は名称】 伊藤 正和

【選任した代理人】

【識別番号】 100101247

【弁理士】

【氏名又は名称】 高橋 俊一

【選任した代理人】

【識別番号】 100098327

#### 【弁理士】

【氏名又は名称】 高松 俊雄

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 平成11年特許願第375859号

【出願日】 平成11年12月28日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 001982

【納付金額】

21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】

明細書 1

【物件名】

図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9707392

【包括委任状番号】 9807824

【プルーフの要否】 要

#### 【書類名】 明細書

【発明の名称】 情報処理装置、不具合解析プログラムを格納したコンピュータ 読み取り可能な記憶媒体、不具合解析方法、及びアプリケーションプログラム開 発支援システム

#### 【特許請求の範囲】

【請求項1】 プログラムの実行履歴情報をもとに、該プログラムの動作状況を時系列にユーザーに対して表示し、表示された動作状況の中でユーザーが指定する不具合の箇所を受付けるユーザーインタフェース手段と、

前記ユーザーインタフェース手段によってユーザーから指定された不具合の箇所と該プログラムの動作状況から不具合要因を解析し、この不具合要因を解決するための解決策を特定する動作解析手段とを有し、

前記動作解析手段は、前記解決策を反映させた動作状況を再作成し、

前記ユーザーインタフェース手段は、前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示することを特徴とする情報処理装置。

【請求項2】 前記動作解析手段において、前記解決策を反映させる箇所を 特定することができない場合に、

更に、ユーザーに該解決策を反映させる箇所の指定を促し、

前記動作解析手段は、このユーザーにより指定された箇所に該解決策を反映させた動作状況を再作成し、

前記ユーザーインタフェース手段は、前記不具合要因と解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示することを特徴とする請求項1記載の情報処理装置。

【請求項3】 前記情報処理装置は、前記解決策を特定するためのプログラム機能対応情報を有することを特徴とする請求項1記載の情報処理装置。

【請求項4】 前記ユーザーインタフェース手段は、ユーザーが不具合の箇所を座標位置により指定することで、該指定箇所を一意に認識することを特徴とする請求項1記載の情報処理装置。

【請求項5】 前記情報処理装置は、更に、

前記解決策と前記実行履歴情報とをもとに、本来の仕様を満たすプログラムの スケルトンを自動生成することを特徴とする請求項1記載の情報処理装置。 【請求項6】 プログラムの実行履歴情報をもとに、該プログラムの動作状況を時系列にユーザーに表示するステップと、

ユーザーから指定された不具合の箇所と該プログラムの動作状況から不具合要 因を解析し、この不具合要因を解決するための解決策を特定するステップと、

前記解決策を反映させた動作状況を再作成するステップと、

前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示するステップと

をコンピュータに実現させることを特徴とする不具合解析プログラムを格納した コンピュータ読み取り可能な記憶媒体。

【請求項7】 請求項6に記載の不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体は、さらに、

前記解決策を反映させる箇所を特定することができない場合に、ユーザーに該解決策を反映させる箇所の指定を促すステップと、

この指定された箇所に該解決策を反映させた動作状況を再作成するステップと

前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示するステップと

をコンピュータに実現させることを特徴とする不具合解析プログラムを格納した コンピュータ読み取り可能な記憶媒体。

【請求項8】 請求項6記載の不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体は、

プログラム機能対応情報テーブルを用いて前記解決策を特定する機能をコンピュータに実現させることを特徴とする不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体。

【請求項9】 請求項6記載の不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体は、さらに、

前記解決策と前記実行履歴情報とをもとに、本来の仕様を満たすプログラムのスケルトンを自動生成するステップをコンピュータに実現させることを特徴とする不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体。

【請求項10】 プログラムの実行履歴情報をもとに、該プログラムの動作 状況を時系列にユーザーに表示するステップと、

ユーザーから指定された不具合の箇所と該プログラムの動作状況から不具合要 因を解析し、この不具合要因を解決するための解決策を特定するステップと、

前記解決策を反映させた動作状況を再作成するステップと、

前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示するステップと

を含むことを特徴とする不具合解析方法。

【請求項11】 請求項10記載の不具合解析方法は、さらに、

前記解決策を反映させる箇所を特定することができない場合に、ユーザーに該解決策を反映させる箇所の指定を促すステップと、

この指定された箇所に該解決策を反映させた動作状況を再作成するステップと

前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表示するステップと

を含むことを特徴とする不具合解析方法。

【請求項12】 請求項10記載の不具合解析方法は、

プログラム機能対応情報テーブルを用いて前記解決策を特定することを特徴とする不具合解析方法。

【請求項13】 請求項10記載の不具合解析方法は、更に、

前記解決策と前記実行履歴情報とをもとに、本来の仕様を満たすプログラムの スケルトンを自動生成するステップを含むことを特徴とする不具合解析方法。

【請求項14】 ハードウェア資源上で実行されるアプリケーションプログラムの開発に用いられる開発支援システムにおいて、

前記ハードウェア資源、およびソフトウェアを含む実行環境での実行時におけるシステム環境と、該実行環境の動作規則を定義する環境定義部と、

環境定義に基づいて前記実行環境におけるアプリケーションプログラムの仮想 実行状態を検証するチェック部と、

前記仮想実行状態を可視的に表示するための表示情報を作成する表示情報作成

部と

を有することを特徴とするアプリケーションプログラム開発支援システム。

【請求項15】 前記表示情報を表示させる表示装置と、

前記表示装置の表示画面上に形成され、可視的に表示された前記仮想実行状態 を変化させる操作を該表示画面上で操作するインタフェース部と

を有することを特徴とする請求項14に記載のアプリケーションプログラム開発 支援システム。

【請求項16】 前記インタフェース部は、

前記仮想実行状態における任意のプログラム実行段階で、前記実行環境からシステムコールを発行させる機能と、

前記仮想実行状態における任意の実行環境の要素に対して、前記実行環境資源 からのシステムコールを発行させる機能と

により該仮想実行状態を変化させるものであることを特徴とする請求項15に記載のアプリケーションプログラム開発支援システム。

【請求項17】 前記インタフェース部は、

前記仮想実行状態における実行環境上で操作される任意のオブジェクトに対して、前記実行環境からのシステムコールを発行させることにより該仮想実行状態を変化させるものであることを特徴とする請求項15に記載のアプリケーションプログラム開発支援システム。

【請求項18】 前記インタフェース部は、

前記仮想実行状態における任意のプログラム実行段階で、前記実行環境上で割り込み起動される他のプログラムによるイベントを発行させることにより該仮想 実行状態を変化させるものであることを特徴とする請求項15に記載のアプリケーションプログラム開発支援システム。

【請求項19】 前記インタフェース部は、

前記仮想実行状態における任意のプログラム実行段階で、前記実行環境上で割り込み起動される他のプログラムによるイベントを発行させる機能と、当該他のプログラムの実行に要する時間を任意の長さに設定する機能とにより該仮想実行状態を変化させるものであることを特徴とする請求項15に記載のアプリケーシ

ョンプログラム開発支援システム。

【請求項20】 前記アプリケーションプログラムを前記実行環境源上で実行可能な形態で出力する実行オブジェクト生成部を有することを特徴とする請求項14記載のアプリケーションプログラム開発支援システム。

#### 【発明の詳細な説明】

[0001]

【発明の属する技術分野】

本発明は、リアルタイムOS (Real-Time Operating System)等で動作するマルチタスク・プログラムのテストやデバッグなどに利用される情報処理装置、不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体、不具合解析方法、及びアプリケーションプログラム開発支援システムに関する。

[0002]

【従来の技術】

TRON (The Real-time Operating system Nucleus) に代表されるリアルタイムOSの適用範囲は、マイクロプロセッサ技術の発展により拡大の一途をたどっており、産業用途のみならず、通信機器やオフィス機器などの業務機器分野、家電や携帯電話などの民生用機器などへも急激に拡大している。

[0003]

一般に、このようなリアルタイムOS配下で実行されるマルチタスク方式のアプリケーション・プログラムの不具合解析をするために、各プログラムの動きを追跡するのは容易でない。リアルタイムOSでは、特定のタイミングで動作するタスクを次々と切り替えていくことによって、複数のプログラムを動かすマルチタスク方式が採られているため、一つのプログラムを追うだけでは解析できないからである。

[0004]

そのため、プログラムの動作を追跡する機能を有するOSが開発され、プログラムの動作状況を解析するためのひとつの手掛りとして、プログラムの実行履歴情報が用いられている。図42に示すように、プログラムの実行履歴情報4は、プログラム動作の追跡機能を有するOS101によってOS101のメモリ上に

出力されたり、更にデバッガ102等の開発ツールによってデバッガ102等が 持つメモリ上に出力されたりする。

[0005]

図44に、μITRON (Micro Industrial TRON ) 仕様のプログラム実行履歴情報を例示する。図44(a)は、システムコール発行履歴のフォーマット例であり、1レコードで1事象を表し、機能のタイプ(type)、発行元タスク(oid)、システムコールの種類(sysid)、発行先タスク(obj)で構成されている。出力される実行履歴情報の種類としては、このようなシステムコール発行履歴の他に、タスク切り換え履歴、ハンドラ実行履歴などがある。

[0006]

図44(b)は、OS101やデバッガ102等によってメモリ上に出力された実行履歴データの例である。(i)は、タスク切り換えが行われたことを表しており、アイドル状態(タスク=0)からタスク1(タスク=1)に制御が移行している。(ii)は、システムコールが発行されたことを表しており、タスク1(oid=1)からsta\_tsk(sysid=-19)という種類のシステムコールがタスク2(obj=2)に対して発行されている。

[0007]

【発明が解決しようとする課題】

上述したように、プログラムの実行履歴をデータとして保存することができる ようになり、プログラムの不具合を解析するための手掛りとして利用されている が、以下のような問題がある。

[0008]

第1に、コントローラのメモリ容量の関係から、履歴情報を採取できる量には 制限があり、実際には図43のように、履歴情報を細切れに保存することになっ てしまう。特に、ローコストを目指したシステムの場合、このメモリ容量はかな り限定されてしまう。

[0009]

第2に、出力される履歴情報は、図44に示したように、主に数字からなる文字の羅列であり、しかも大量に出力されがちであることから、この履歴情報を手

6

掛りにプログラムの動作軌跡を辿って不具合を解析することは、大変困難である

#### [0010]

その結果、プログラムの不具合解析には、依然として多大な時間を要し、開発 コストや開発期間などに大きな影響を与えていた。

#### [0011]

また、従来、ある実行環境向けに行うプログラミング段階において、その実行環境管理下にある資源の状態変化を把握することや、プログラミング内容の整合性判定、そして実行環境ハードウェアが持つ割り込み機能等を考慮しながらプログラミングすることはできても、その整合性を確認する術がなく、実際にそのプログラムから作成される実行オブジェクトを、実行環境と同じ条件で実行させ、アプリケーションシステムの振る舞いを確認する方法が取られている。

#### [0012]

しかしながら、上述した従来の方法では、単純なプログラミングミスも実行オ ブジェクトを実際に実行させないと、そのミスが判明しないという問題があった

#### [0013]

そこで、本発明はこのような課題を解決するためになされたものであって、対 話形式でユーザーから指摘された不具合箇所とプログラムの実行履歴情報から、 不具合要因と解決策を特定し、これをユーザーに提示することができる情報処理 装置、及び情報処理装置に搭載される不具合解析プログラムを格納したコンピュ ータ読み取り可能な記憶媒体を提供することを目的とする。

#### [0014]

本発明の第2の目的は、前記特定した不具合要因と解決策から、該不具合を解決したプログラムを生成してユーザーに提示することができる情報処理装置、及び情報処理装置に搭載される不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体を提供することを目的とする。

#### [0015]

更に、本発明の第3の目的は、プログラミング段階において、その実行環境の

動作規則に従いアプリケーションシステムの振る舞いを視覚的に確認し、早期に プログラミングの不整合発見を行い、作業行程の戻りを低減させることにより、 効率的なアプリケーションシステム開発を可能とすることのできるアプリケーション開発システムを提供することを目的とする。

[0016]

#### 【課題を解決するための手段】

上記課題を解決するために、本発明は、プログラムの実行履歴情報をもとに、 該プログラムの動作状況を時系列にユーザーに表示する表示手段と、表示された 動作状況の中でユーザーが不具合の箇所を指定するための入力手段と、前記入力 手段によってユーザーから指定された不具合の箇所と該プログラムの動作状況か ら該不具合要因を解析し、この不具合要因を解決するための解決策を特定する動 作解析手段とを有し、前記動作解析手段は、解決策を反映させた前記動作状況を 再作成し、前記表示手段は、前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況 とをユーザーに表示することを特徴とする。

#### [0017]

このとき、前記解決策を反映させる箇所を特定することができない場合には、 更に、ユーザーによって該解決策を反映させる箇所を指定させ、前記動作解析手 段は、この指定された箇所に該解決策を反映させた前記動作状況を再作成し、前 記表示手段は、前記不具合要因と解決策と再作成した動作状況とをユーザーに表 示することを特徴とする。

[0018]

更にまた、前記解決策と前記実行履歴情報とをもとに、本来の仕様を満たすプログラムのスケルトンを自動生成することを特徴とする。

[0019]

本発明により、対話形式により、ユーザーから指摘された不具合箇所とプログラムの実行履歴情報から不具合要因と解決策を特定し、これをユーザーに提示することができる。

[0020]

また、前記特定した不具合要因と解決策から、該不具合を解決したプログラム

を生成して同様にユーザーに提示することができる。

[0021]

更にまた、本発明は、ハードウェア資源上で実行されるアプリケーションプログラムの開発に用いられる開発支援システムにおいて、前記ハードウェア資源、およびソフトウェア部品を含む実行環境での実行時におけるシステム環境と、該実行環境の動作規則を定義する環境定義部と、環境定義に基づいて前記実行環境におけるアプリケーションプログラムの仮想的な実行状態(以下「仮想実行状態」という。)を検証するチェック部と、前記仮想実行状態を可視的に表示するための表示情報を作成する表示情報作成部とを有することを特徴とする。

[0022]

本発明においては、前記表示情報を表示させる表示装置と、前記表示装置の表示画面上に形成され、可視的に表示された前記仮想実行状態を変化させる操作を 該表示画面上で操作するインターフェース部とを設けることが好ましい。

[0023]

このような本発明によれば、実行環境の動作規則等の環境定義に従い、実際のハードウェア資源上における実行状態を再現することができ、これによりアプリケーションシステムの振る舞いを検証することができるため、従来方法よりも早期のプログラミングの不整合発見が行うことができ、作業行程の戻りも少なくなり効率的なアプリケーション開発が可能となる。

[0024]

本発明のその他の目的、特徴、効果は、以下で図面を参照して述べる詳細な説明により、一層明らかになるものである。

[0025]

【発明の実施の形態】

以下、図面に基づいて、本発明の実施形態について説明する。

[0026]

図1は本発明に係る情報処理装置の一実施形態を示す概略構成図であり、図2 は本発明に係る情報処理装置に搭載される不具合解析プログラムを格納したコン ピュータ読み取り可能な記憶媒体の処理の流れを示した流れ図である。

9

[0027]

図1において、この情報処理装置は、ユーザー5からの入力11を受付け、又ユーザー5に情報を提示12するユーザーインタフェース部1と、ユーザーインタフェース部1が受付けたユーザー5からの入力情報を解析してタスク動作判定部3に送る要求解析部2と、実行履歴ファイル4に格納されているプログラムの実行履歴情報11とシステムコール対応テーブル7とタスク動作判定部3からの情報をもとにプログラムの不具合要因とその解決策を特定し、各種解析結果情報をユーザーインタフェース部1に送り、さらに解析結果情報から不具合を解決するプログラムを生成してプログラムファイルに出力するタスク動作判定部3とから構成される。

[0028]

続いて、図2をもとに、全体の処理の流れを説明する。

[0029]

ユーザーインタフェース部1は、予めタスク動作判定部3がプログラムの動作 履歴情報11をもとに作成した検証データ14(図3)をユーザー5に表示する (ST01)。ユーザー5は表示された検証データ14を見て、動作的に不具合がないと確認した場合、処理を終了する (ST04)。一方、ユーザー5は表示された検証データ14の中に不具合を発見した場合、その不具合箇所を指摘する (ST05)。ユーザーインタフェース部1は、ユーザー5が入力した不具合の箇所12を、要求解析部2に転送する (ST06)。

[0030]

次に、要求解析部2は、ユーザーインタフェース部1から受取ったユーザー5が入力した指摘箇所12と先にタスク動作判定部3が作成した検証データ14から、比較データ13(図4)を作成し(ST07)、作成した比較データ13をタスク動作判定部3に転送する(ST08)。

[0031]

次に、タスク動作判定部3は、要求解析部2から受取った比較データ13と先に作成しておいた検証データ14とを比較して、要求タスクの状態を検索し(ST0)、不具合の要因を解析する(ST10)。タスク動作判定部3は不具合の要因を

特定したら、不具合を解決する機能を検証データ14に反映させた上で、検証データ14をユーザーインタフェース部1に転送する(ST11)。続いて、タスク動作判定部3は、判定結果データ1(図5)及び判定結果データ2(図6)を作成してユーザーインタフェース部1に転送する(ST12)。

[0032]

ここまでで不具合が全て解決されていて(ST13)、且つ処理終了をする場合(ST15)には、ST11で更新した検証データ14をもとに不具合を解決した正常プログラム・ソース18を生成し(ST16)、ユーザーインタフェース部1に制御を戻す。一方、未解決の不具合要因が残っている場合(ST14)、不具合を解決するためにユーザーに問い合せる不具合解決用質問データ17(図7)を作成し、ユーザーインタフェース部1に転送し(ST14)、ユーザーインタフェース部1に制御を戻す。

[0033]

以上説明したST01からST16までの処理を、プログラムの不具合が解決されて処理を終了するまで繰り返す。

[0034]

次に、実際に不具合が存在するプログラム例に基づいて、本発明の不具合解析 プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体を搭載した情報処理 装置の処理動作について、更に詳細に説明する。

[0035]

ここでは、μITRON3. 0仕様のリアルタイムOS配下で動作するアプリケーション・プログラムを例に説明する。

[0036]

(第1実施例)

本実施例では、アラーム機能付きの時計のプログラムを想定する。本プログラムで使用するタスクは以下の3本である。

[0037]

- (1) startup (task ID=1, priorty=1) [アラーム設定モード]
- (2) タスクA (task ID=2,priorty=3) [ノーマルモード]

#### (3) タスクB (task\_ID=3,priorty=2)

本プログラムは、アラームを設定すると(アラーム設定モードを処理すると)、ノーマルモードに移行し、その後処理を終了するものであり、本来は図8に示すタイムチャートのような動作を想定して作成されたアプリケーション・プログラムである。従って、例えば処理終了時点を注目してみると、タスクA(ノーマルモード)で処理が終了する、つまりその時点での最終実行タスクはタスクAである、というのがこのプログラムの本来の仕様である。

[0038]

ところが、実際にこのプログラムを動作させてみたところ、図9に示すような結果が得られたとする。実行結果の処理終了時点を注目してみると、startup タスク(アラーム設定モード)で処理が終了している。すなわち、このプログラムは本来の仕様を満たしていない、このプログラムには不具合が潜在しているということである。

[0039]

このような状況において、ユーザー5は本発明の情報処理装置及び情報処理装置に搭載された不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体を使用して、以下のように不具合を解決することができる。

[0040]

「処理1]

ユーザーインタフェース部1の処理の流れを図10示す。

[0041]

ユーザーインタフェース部1は、予めタスク動作判定部3がプログラムの動作 履歴情報11をもとに作成した検証データ14(図3)をユーザー5に表示する (ST21~ST24)。ユーザー5への表示例を図11に示す。図11のようにプログラムの各タスクの動作とタスクの切り換えの様子を時系列に表せば、ユーザー5 は表示されたプログラムの動作における不具合を指摘しやすい。特に、数字の羅列である実行履歴情報11をグラッフィックで表現することは有効である。

[0042]

ここで、ユーザー5は当該プログラムの不具合箇所を指摘する入力を行う(ST

26)。この場合、図11に示した位置(最終イベントの後のタスクAの位置)にマウスカーソルを指定したとする。この指定位置が、ユーザー5が指摘した不具合の箇所となる。本来のプログラムの仕様では、この時点ではタスクAは実行状態でなければならないはずである。

[0043]

ユーザーインタフェース部1は、ユーザー5が入力した不具合の箇所データ12を、要求解析部2に転送(ST27)し、要求解析部2に制御を移す。このとき転送する不具合箇所データ12は、図11においてマウスカーソルを指定した位置、すなわちイベント順を示していたX軸とタスクを示していたY軸との座標位置で一意に認識することができる。ユーザーが指摘した箇所データ12は、X=7、Y=3である。

[0044]

続いて、図12に要求解析部2の処理の流れを示す。

[0045]

要求解析部2は、ユーザーインタフェース部1から受取った不具合箇所データ12と先にタスク動作判定部3が作成した検証データ14から、要求内容を解析する。まず、X座標値と検証データ14のイベントとを比較し、ユーザー5の要求タイミングを特定する(ST28)。次に、Y座標値と検証データ14のアイテム順から、ユーザーが要求しているタスクを特定する(ST29)。このときの処理イメージを図13に示す。すなわち、ユーザー5の要求タイミングはイベントの最後(第7イベントの位置)、要求タスクはタスクA(3番目のアイテム)である

[0046]

要求解析部2は、このようにして比較データ13を作成し(ST30)、作成した 比較データ13をタスク動作判定部3に転送して、制御をタスク動作判定部3に 移す。尚、このときの検証データ14と比較データ13を図16に示す。

[0047]

[第1次要求]

この場合の要求タスクはタスクAであり、要求タイミングはイベントの最後で

ある。

[0048]

[処理2]

続いて、図14にタスク動作判定部3の処理の流れを示す。

[0049]

タスク動作判定部3は、要求解析部2から受取った比較データ13と先に作成しておいた検証データ14とを比較して、要求タスクの状態を検索する(ST31)。図16に示す検証データ14を検索してみると、イベントの最後の時点でのタスクAの状態は、「実行可能 (READY)」状態であることが判る(ST32)。「実行可能」状態にあるタスクとは、実行する準備は整っているが、自分より優先度の高いタスクもしくは優先度が自分と同じであるタスクが「実行 (RUNNING)」状態であるために、実行できない状態にある、言いかえると、実行できる状態のタスクの中で自分が最高の優先順位になればいつでも実行できる状態にあるタスクである。

[0050]

本発明の情報処理装置の不具合解析処理が終了するのは(目的を達成するのは)、ユーザーが第1次要求で指摘したタスク、すなわちタスクAがイベントの最後の時点で「実行」状態になることである。

[0051]

タスクAを「実行」状態にするまで(不具合要因を特定するまで)、以下に説明する判定結果データ1、判定結果データ2を作成し、作成した判定結果データから本来あるべき処理を特定し、それを検証データ14に反映させる。このときの各データの状態を図17に示す(但し、図17は処理完了状態の図である)。

[0052]

まず、Nの値を判定結果データ1の(1)欄と判定結果データ2の(1)欄に入れる(ST33)。ここでは第1次要求であるため、Nの値は「1」である。判定結果データ1の(1)欄と判定結果データ2の(1)欄のそれぞれの欄に「1」が入る。

[0053]

次に、判定結果データ1の(2)欄に要求タスクであるタスクAを入れ、判定結果データ1の(3)欄にタスクAの状態を入れる(ST34)。

[0054]

次に、検証データ14から、イベントの最後の時点で「実行」であったタスクを検索する(ST35)。この場合、イベントの最後の時点で「実行」であったタスクは、startupタスクである。検索したこのタスクを判定結果データ2に入れる(ST36)。

[0055]

次に、判定結果データ2に入れたタスク(この場合、startup タスク)が「ext\_tsk」 を発行した場合の検証データ14を作成する(ST37)。具体的には、7番目のイベントに、startup タスクが「ext\_tsk」を発行するというイベントを検証データ14に作成するのである。(必然的に、第8イベントとしてタスク切り換え(「Task Dispatch」)が発生する。)

そして、このイベント(第7~8イベント)を検証データ14に反映させたことで、第1次要求のタスクAが「実行」状態に遷移したかどうかを、検証データ14から検索するのである(ST38)。

[0056]

以上のST33~ST39までの処理を、第1次要求のタスクAが「実行」状態になるまで繰り返す(ST39)。

[0057]

この場合に、「実行」状態に遷移したのは、タスクAではなく、タスクBである。従って、再びST33に戻って、タスクAがイベントの最後の時点で「実行」状態になるための処理を行う。

[0058]

[処理3]

まず、Nの値を判定結果データ1の(1)欄と判定結果データ2の(1)欄に入れる(ST33)。ここでは第1次要求であるため、Nの値は「1」である。それぞれの欄に「1」が入る。

[0059]

次に、判定結果データ1の(2)欄に要求タスクであるタスクAを入れ、判定結果データ1の(3)欄にタスクAの状態を入れる(ST34)。検証データ14から、タスクAの状態は「実行可能」であることが判る。

[0060]

次に、検証データ14から、イベントの最後の時点で「実行」状態であったタスクを検索する(ST35)。この場合、イベントの最後の時点で「実行」状態であったタスクはタスクBである。検索したこのタスクBを判定結果データ2に入れる(ST36)。

[0061]

次に、判定結果データ2に入れたタスク(この場合、タスクB)が「ext\_tsk」を発行した場合の検証データ14を作成する(ST37)。具体的には、9番目のイベントに、タスクBが「ext\_tsk」を発行するというイベントを検証データ14に作成するのである。(必然的に、第10イベントとしてタスク切り換え(「Task Dispatch」)が発生する。)

そして、このイベント(第9~10イベント)を検証データ14に反映させたことで、第1次要求のタスクAが「実行」状態に遷移したかどうかを、検証データ14から検索するのである(ST38)。

[0062]

この場合は、タスクAが「実行」の状態に遷移したので、処理終了のフラグ等をセットして(ST51)、イベント7~10を反映させた検証データ14から今回の不具合を解決したプログラムのスケルトンを生成し、プログラムファイル6に出力する(ST52)。このときのプログラムの生成例を図18に示す。図18の(a)及び(b)に示すステップが、今回の不具合要因とその解決策であった。

[0063]

図17に示すように、第1次要求のタスクAが「実行」状態に至るまで要した 判定結果データ1,判定結果データ2と検証データ14を、ユーザーインタフェ ース部1に転送し、制御をユーザーインタフェース部1に戻す。

[0064]

ユーザーインタフェース部1は、タスク動作判定部3から転送された検証デー

タ14、判定結果データ1、判定結果データ2をユーザーに表示する。これにより、今回の不具合の要因とその解決策をユーザー5に提示することができ、また、本来の仕様に沿ったプログラムの動作をユーザー5に提示することができる。

[0065]

また、本来の仕様を満たしたプログラムがプログラムファイル6に出力されているので、ユーザー5はこれを利用することができる。

[0066]

(第2実施例)

本実施例で想定するプログラムが使用するタスクは以下の4本である。

[0067]

- (1) startup (task ID=1,priorty=1)
- (2) タスクA (task\_ID=2,priorty=2)
- (3) タスクB (task\_ID=3,priorty=2)
- (4) タスクC (task\_ID=4,priorty=2)

(使用するセマフォ: Semaphore (ID=1,初期セマフォカウンタ=0))

本プログラムは、第1実施例と同様に、本来は図19に示すタイムチャートのような動作を想定して作成されたアプリケーション・プログラムである。従って、例えば処理終了時点を注目してみると、タスクBで処理が終了する、つまりその時点での最終実行タスクはタスクBである、というのがこのプログラムの本来の仕様である。

[0068]

ところが、実際にこのプログラムを動作させてみたところ、図20に示すような結果が得られたとする。実行結果によると、「Idle Mode」(レディーキューにタスクがない状態)になっている。

[0069]

このような状況において、ユーザー5は本発明の情報処理装置及び情報処理装置に搭載された不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体を使用して、以下のように不具合を解決することができる。

[0070]

[処理1]

図10のフローチャートに沿って、処理の流れを説明する。

[0071]

ユーザーインタフェース部1は、予めタスク動作判定部3がプログラムの動作 履歴情報11をもとに作成した検証データ14をユーザー5に表示する (ST21~ST24)。

[0072]

ここで、ユーザー5は不具合箇所を指摘する入力を行う(ST26)。この場合、 実施例1と同様に、ユーザー5はイベントの最後を指摘したものとする。この指 定位置が、ユーザー5が指摘した不具合の箇所となる。本来のプログラムの仕様 では、この時点ではタスクBは実行状態でなければならないはずである。

[0073]

ユーザーインタフェース部 1 は、ユーザー 5 が入力した不具合の箇所データ 1 2 を、要求解析部 2 に転送(ST27)し、要求解析部 2 に制御を移す。ユーザーが指摘した箇所データ 1 2 は、X=1 2 、Y=4 である。

[0074]

要求解析部2の処理の流れを図12のフローチャートに沿って説明する。

[0075]

要求解析部2は、ユーザーインタフェース部1から受取った不具合箇所データ 12と先にタスク動作判定部3が作成した検証データ14から、要求内容を解析 する。まず、X座標値と検証データ14のイベントとを比較し、ユーザー5の要求タイミングを特定する(ST28)。次に、Y座標値と検証データ14のアイテム 順から、ユーザーが要求しているタスクを特定する(ST29)。この場合、ユーザー5の要求タイミングはイベントの最後(第12イベントの位置)、要求タスクはタスクB(4番目のアイテム)である。

[0076]

要求解析部2は、このようにして比較データ13を作成し(ST30)、作成した 比較データ13をタスク動作判定部3に転送して、制御をタスク動作判定部3に 移す。尚、このときの検証データ14と比較データ13を図21に示す。 [0077]

[第1次要求]

この場合のユーザー5の要求タスクはタスクBであり、要求タイミングはイベントの最後である。

[0078]

[処理2]

続いて、タスク動作判定部3の処理の流れを図14のフローチャートに沿って 説明する。

[0079]

タスク動作判定部3は、要求解析部2から受取った比較データ13と先に作成しておいた検証データ14とを比較して、要求タスクの状態を検索する(ST31)。図21に示す検証データ14を検索してみると、要求タイミングである「イベントの最後」の時点でのタスクBの状態は、「待ち (WAITING)」状態であることが判る(ST32、ST40)。「待ち」状態にあるタスクとは、そのタスクを実行できる何らかの条件が整わないために実行できない状態にある、言いかえると、何らかの条件が満たされるのを待っている状態にあるタスクである。

[0080]

本発明の情報処理装置の不具合解析処理が終了するのは(目的を達成するのは)、ユーザーが第1次要求で指摘したタスク、すなわちタスクBがイベントの最後の時点で「実行」状態になることである。

[0081]

この場合には、タスクBの状態を「実行」状態にする前に、まず「実行可能」 状態にする必要がある。「待ち」状態にあるタスクは、直接「実行」状態には移 行できないためである。その処理を以下に説明する。

[0082]

まず、Nの値を判定結果データ1の(1)欄と不具合解決用質問データの(1)欄に入れる(ST45)。ここでは第1次要求であるため、Nの値は「1」である。それぞれの欄に「1」が入る。

[0083]

次に、判定結果データ1の(2)欄に要求タスクであるタスクBを入れ、判定結果データ1の(3)欄にタスクBの状態(「待ち」)を入れる(ST46)。

[0084]

次に、この第1次要求の要求タスクBを「実行可能」状態に遷移させることができるシステムコールをシステムコール対応テーブル7から検索する(ST47)。 このシステムコール対応テーブル7には、解決策を特定するためのプログラム機能対応情報が格納されており、その一例を図15に示す。

[0085]

この場合、図21の検証データ14によると、タスクBは「slp\_tsk」によって「(起床) 待ち」の状態にあるため、図15のシステムコール対応テーブル7から「slp\_tsk」に対応するシステムコールを検索するのである。図15のシステムコール対応テーブル7を検索すると、2番目のエントリに「slp\_tsk」があり、それに対応するシステムコールは「wup\_tsk」である。この「wup\_tsk」を発行すれば、タスクBの状態を「待ち」から「実行可能」に遷移させることができるのである。検索結果の「wup\_tsk」を不具合解決用質問データの(3)欄に入れる(ST48)。

[0086]

次に、不具合解決用質問データの(2)欄に、タスクBの状態を「待ち」から「実行可能」に遷移させるシステムコールである「wup\_tsk」の発行対象タスクを入れる(ST49)。この場合、発行対象タスクはタスクAである。

[0087]

この「wup\_tsk」を「何時」「何処」で発行するか、ということは機械的には 決められない。発行するタイミング、発行する場所によって、処理が変わってし まうからである。従って、このシステムコール「wup\_tsk」を「何時」「何処」 で発行するべきなのかをユーザー5に問合せる。この問合せのためのデータが不 具合解決用質問データなのである。

[0088]

この不具合解決用質問データによる問合せを第2次要求とする(Nに1加算する(ST50))。ユーザーインタフェース部1に制御を戻し、ユーザー5に検証デ

ータと不具合解決用質問データを提示し、質問に対する回答の入力を促す。

[0089]

[第2次要求]

この場合、ユーザー5が要求した要求タスクはタスクA、要求タイミングは「システムコール「wai\_sem」を発行した後」であったとする。

[0090]

「処理3]

ユーザーインタフェース部 1 に戻って、ユーザー 5 が入力した箇所のデータ 1 2 を、要求解析部 2 に転送(ST27)し、要求解析部 2 に制御を移す。このとき転送する箇所データ 1 2 は、X=6, Y=3 である。

[0091]

要求解析部2は、比較データ13を作成し(ST30)、作成した比較データ13 をタスク動作判定部3に転送して、制御をタスク動作判定部3に移す。尚、この ときの検証データ14と比較データ13を図22に示す。

[0092]

タスク動作判定部 3 は、要求解析部 2 から受取った比較データ 1 3 と検証データ 1 4 とを比較して、要求タスクの状態を検索する(ST31)。図 2 2 に示す検証 データ 1 4 を検索してみると、要求タイミングでのタスク A の状態は、「(セマフォ資源の獲得)待ち」状態であることが判る(ST32、ST40)。この場合には、タスク A の状態を「待ち」から「実行可能」にする必要がある。その処理を以下に説明する。

[0093]

まず、Nの値を判定結果データ1の(1)欄と不具合解決用質問データの(1)欄に入れる(ST45)。ここでは第2次要求であるため、Nの値は「2」である。それぞれの欄に「2」が入る。

[0094]

次に、判定結果データ1の(2)欄に要求タスクであるタスクAを入れ、(3) )欄にタスクAの状態(「待ち」)を入れる(ST46)。

[0095]

次に、この第2次要求の要求タスクAを「実行可能」状態に遷移させることができるシステムコールをシステムコール対応テーブル7から検索する(ST47)。 対応するシステムコールは「sig\_sem」である。この「sig\_sem」を発行すれば、タスクBの状態を「待ち」から「実行可能」に遷移させることができるのである。検索結果の「sig\_sem」を不具合解決用質問データの(3)欄に入れる(ST48)。

[0096]

次に、不具合解決用質問データの(2)欄に、タスクBの状態を「待ち」から「実行可能」に遷移させるシステムコールである「sig\_sem」の発行対象タスクを入れる(ST49)。この場合、発行対象タスクはタスクCである。

[0097]

この「wup\_tsk」を「何時」「何処」で発行するか、ということも機械的には 決められない。発行するタイミング、発行する場所によって、処理が変わってし まうからである。従って、このシステムコール「sig\_sem」を「何時」「何処」 で発行するべきなのかをユーザー5に問合せる。

[0098]

この不具合解決用質問データによる問合せを第3次要求とする。Nに1加算して、ユーザーインタフェース部1に制御を戻し(ST50)、ユーザー5に検証データと不具合解決用質問データを提示し、質問に対する回答の入力を促す。

[0099]

[第3次要求]

この場合、ユーザー5が要求した要求タスクはタスクC、要求タイミングは「システムコール「ext\_tsk」を発行する前」であったとする。

[0100]

[処理4]

ユーザーインタフェース部1に戻って、ユーザー5が入力した箇所のデータ12を、要求解析部2に転送(ST27)し、要求解析部2に制御を移す。

[0101]

要求解析部2は、比較データ13を作成し(ST30)、作成した比較データ13

をタスク動作判定部3に転送して、制御をタスク動作判定部3に移す。尚、この ときの検証データ14と比較データ13を図23に示す。

[0102]

タスク動作判定部3は、要求解析部2から受取った比較データ13と検証データ14とを比較して、要求タスクの状態を検索する(ST31)。図22に示す検証データ14を検索してみると、要求タイミング「システムコール「ext\_tsk」を発行する前」時点でのタスクCの状態は、「実行」状態であることが判る(ST32、ST40)。

[0103]

このように要求タスクの要求タイミング時点での状態が「実行」状態である場合には、ひとつ前の(N-1の)不具合解決用質問データのシステムコールを要求タイミング時に発行した場合の検証データ14を作成する(ST41)。本実施例でいうと、不具合解決用質問データのN=2の時のシステムコールである「sig\_sem」をタスクCが発行した場合の検証データを作成することになる(図24の検証データを参照)。

[0104]

次に、第2次要求タスクのイベントの最後の時点での状態を検証データ14から検索する(ST42、ST43)。

[0105]

検索の結果、第2次要求タスクAは「実行」状態に遷移している。判定結果データ1のタスクAの状態を「実行」状態に書きかえる(ST44)。

[0106]

これで、第2次要求タスクの状態が「実行」状態に遷移したことで、第3次要求は満たされた。しかし、第1要求のタスクBは依然として「実行可能」状態のままであるため、ここまで作成した検証データ、判定結果データ、不具合解決用質問データ(第1次分)をユーザーインタフェース部1に転送し、制御をユーザーインタフェース部1に戻す(ST38~39)。

[0107]

そして、これまで説明した処理に準じて、第1次要求のタスクBが第1次要求

タイミングである「イベントの最後」の時点で「実行」状態に遷移するまで、処理を繰り返す。このタスクBが「イベントの最後」の時点で「実行」状態に遷移するまでの検証データ、比較データ、判定結果データ1、判定結果データ2、及び不具合解決用データの状態を、図21~図26に示す。

[0108]

図26に示した検証データが本来のプログラムの仕様を満たすものであり、同じく図26に示した判定結果データ1,2と不具合解決質問データが今回の不具合の要因となっていたものである。本発明の情報処理装置は、これらの各データをユーザー5に提示することで、プログラムの不具合要因とその解決策を対話形式でユーザーに提示できる。

[0109]

また、処理終了時には、第1実施例と同様にして、図26の検証データからプログラムのスケルトンを自動生成し、ユーザー5に提供することができる。

[0110]

以上、第1実施例及び第2実施例を用いて説明したように、本発明の不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体を搭載した情報処理装置を用いることにより、対話形式で不具合要因とその解決策を容易に特定でき、更に、本来の仕様に沿ったプログラムの動作、及び本来の仕様に沿ったプログラムをも容易に取得することができる。

[0111]

つまり、対話形式でユーザーから指摘された不具合箇所とプログラムの実行履 歴情報から不具合要因とその解決策を特定し、更にこの解決策を反映させたプロ グラムの動作をユーザーに提示することができる。

[0112]

また、前記特定した不具合要因とその解決策から、上記不具合を解決したプログラムを自動生成してユーザーに提示することができる。

[0113]

その結果、プログラムの不具合解析作業を容易にし、従来不具合解析に要して いた時間を短縮することができ、プログラムの開発コストや開発期間などを低減 することができる。

[0114]

(第3実施例)

本発明に係るアプリケーションプログラム開発支援システムの実施形態について説明する。なお、本実施形態では、あるマイコン向けの組込み用リアルタイムOS(μITRON3.0仕様)に対応したアプリケーションプログラムを開発する場合を例に説明する。

[0115]

[ハードウェア資源の構成]

図27は、本実施形態に係るアプリケーション開発システム20を実施するためのハードウェア資源の構成を示す概観図である。

[0116]

図27に示すように、ハードウェア資源は、中央処理装置(CPU)51と、RAM52とを備えている。なお、本実施形態では、中央処理装置(CPU)51、RAM52は、バス58を介して、ROM53、通信装置54、補助記憶装置55、表示装置56、入力装置57及び出力装置59に接続されている。

[0117]

ROM53や補助記憶装置55には、コンピュータ・プログラムのコードが記録されている。このコンピュータ・プログラムは、アプリケーション開発システム20上のオペレーティングシステムと協働して中央処理装置51等に命令を与えるものである。コンピュータ・プログラムコードは、RAM52にロードされることによって実行される。なお、このコンピュータ・プログラムのコードは、圧縮され、または、圧縮したコードも含め、複数に分割して、複数の媒体にまたがって記録することもできる。

[0118]

また、本実施形態において、アプリケーション開発システム20へのデータの 入出力をするユーザ・インターフェース・ハードウェアとしては、画面位置情報 、文字情報を入力するための入力装置57や、画像データをユーザに提示するた めの表示装置56、出力装置59がある。入力装置57としては、例えば、ポイ ンティングデバイスやキーボード等がある。この他、データの入出力の方法としては、通信装置54を介して他のコンピュータ等から入力データを受け取ることや、また補助記憶装置55などの媒体から行うものが挙げられる。また、表示装置56は、モニターやプリンターなど、データを可視化して出力するものである

#### [0119]

このように、アプリケーション開発システム20は、パーソナルコンピュータやワークステーション、携帯情報端末、ネットワークコンピュータ上における実施、あるいはこれらの組合せによるハードウェア構成での実施も可能である。ただし、これらのハードウェア構成は例示であり、全ての構成要素がアプリケーション開発システム20の必須の構成要素となるものではない。

#### [0120]

[アプリケーション開発システムの構成]

上述したハードウェア構成によりアプリケーション開発プログラムを実行することによって、かかるハードウェア構成上に本発明のアプリケーション開発システムが仮想的に構築される。図28は、本実施形態において構築されたアプリケーション開発システムの構成を模式的に示すブロック図である。

#### [0121]

同図に示すように、本実施形態に係るアプリケーション開発システムは、環境 定義部31と、プログラミング部32と、テンプレートファイル生成部40と、 環境定義ファイル生成部43と、チェック部45と、実行オブジェクト部46と 、表示情報作成部48とを有している。

#### [0122]

環境定義部31は、入力された環境定義データを解析し、解析した結果をプログラミング部32に供給するものである。この環境定義データには、開発するアプリケーションシステムが利用するRTOS管理下のオブジェクト数や、その初期化設定、開発アプリケーションシステムが稼働するマイコンに発生する外部/内部割り込み要因に対する初期化データ等が含まれる。また、この環境定義部31は、解析結果から環境定義情報49を生成する。環境定義情報は、環境定義フ

アイルを生成する際には、環境定義ファイル生成部43に入力される。

[0123]

プログラミング部32は、入力装置7を介して行われるプログラミング操作により開発プログラムを構築するものである。

[0124]

テンプレートファイル生成部40は、プログラミング部32からテンプレートファイル生成の命令を受け取り、プログラミング情報38の情報を基に、テンプレートファイル42を生成し、出力するものである。

[0125]

また、環境定義ファイル生成部43は、入力された環境定義データをファイル形式に形成するものである。

[0126]

チェック部45は、環境定義データに基づいて開発対象であるアプリケーションプログラムを実行させる実行環境の動作規則に従い、仮想的に構築し、この仮想環境の下で開発プログラムの動作チェックを行うものである。具体的には、本実施形態では、システムコール選択チェック部50と、システムコール発行位置チェック部35と、システムコール操作対象位置チェック部36と、RTOSカーネルチェック部37とを有している。

[0127]

システムコール選択チェック部50は、選択されたシステムコールが、プログラミングの対象となる動作環境下において、現実に発行しうるか 否かについて判断するものである。

[0128]

システムコール発行位置チェック部35は、システムコールを発行すると仮定した位置、もしくはタイミングが、システムコールを現実に発行するものか否かについて判断するものである。

[0129]

システムコール操作対象位置チェック部36は、システムコールを発行すると 仮定した対象について、システムコールが現実に発行した場合に、操作できるの か否かについて判断するものである。

[0130]

RTOSカーネルチェック部37は、本実施形態に係るハードウェア資源上で動作するOSであるRTOSの動作について、確認するものである。

[0131]

また、前記実行オブジェクト部46は、開発されたプログラムをコンパイルし、実行オブジェクトファイル(電子ファイル)として出力するものである。前記表示情報作成部48は、モニター等の表示装置6等において出力可能に、各情報を生成するものである。

[0132]

[GUI (Graphical User Interface) の構成]

次いで、プログラミング装置32のインタフェースであるGUI (Graphical Us er Interface) の構成について説明する。図29及び図30は、表示装置6に表示された画面構成を示すものである。

[0133]

このGUIは、表示装置6に、ウインドウ70として表示され、このウインドウ70は、プログラム中において発行したいシステムコールを選択するシステムコール選択ペイン61と、プログラム中において利用可能な実行環境提供の資源オブジェクト、およびRTOS管理下のオブジェクト(以下「オブジェクト」という。)/割り込み要因別にグループ別に表示するオブジェクト表示ペイン62と、プログラミングを行うプログラミング作業ペイン63とを有している。

[0134]

プログラミング作業ペイン63には、システムコール発行位置(オブジェクト)、操作位置(オブジェクト)を指定するために各オブジェクト毎に設けられたシーケンスライン64と、プログラム中における、理論的なシステムコール発行タイミングや、発行順を定める目盛りペイン65がインタフェースとして備えられている。

[0135]

なお、プログラミング作業ペイン63は、タスク部のプログラミングを行うタ

スク部プログラミング作業ペインと、タスク独立部別に、タスク独立部のプログ ラミングを行うハンドラ部プログラミング作業ペインから構成される。

[0136]

そして、プログラミング装置32が起動された際に取得された環境定義情報4 9は、図30に示すように、オブジェクト表示ペイン62に表示される。

[0137]

オブジェクト表示ペイン62は、プログラム中において利用可能なオブジェクト /割り込み要因を表示するタスクオブジェクトグループ82を有している。この タスクオブジェクトグループ82では、周期起動ハンドラグループ85などのグ ループ分けがなされており、各グループに属する個々のオブジェクトにはオブジェクト名83と、初期状態設定が行われている場合は、オブジェクト初期情報8 4が併せて表示される。なお、未定義オブジェクトに関しては、オブジェクトグ ループ名だけが表示される。

[0138]

すなわち、例えば、図中タスクオブジェクト\_usr3cdのオブジェクト初期情報は、"ID"がタスクID情報を意味し、"Pri"がタスク優先度情報を意味し、"1st"が初期起動タスク情報(アプリケーションプログラム処理において、最初、実行状態タスクであることを意味する。)を意味する。つまり、本実施形態では、プログラミング作業ペイン63において、プログラミングを始める場合は、\_usr3cdが最初にシステムコール発行を行う。

[0139]

また、本実施形態において、システムコール発行操作は、システムコール選択ペイン61から、発行するシステムコールを選択した後に、目盛りペイン65にある目盛り1つに、1つのシステムコールを、その目盛り位置における実行状態タスクのシーケンスライン64上に置くことにより行う。

[0140]

これによりシステムコール発行位置を仮定することができる。プログラミングは、目盛り位置: 0 を起点として構築し、プログラム処理は目盛り位置: 0 から順に行われる。また、本実施形態において、この目盛りペイン 6 5 には、目盛り

間を開けてシステムコールを発行することを防ぐ機能が装備されている。

[0141]

発行したシステムコールが、操作対象オブジェクト指定を必要とする場合は、 操作対象オブジェクトが有するシステムコール発行位置と同一目盛り位置のシー ケンスライン64上を指定する。この位置が、システムコール操作対象位置と仮 定される。システムコール操作対象位置選択時、システムコール発行位置とは違 う目盛り位置を選択できない機能を装備している。

[0142]

システムコール発行の操作には、発行時のプログラミング作業ペイン63において、発行可能目盛りの最大値に発行する追加操作、プログラミング作業ペイン63にある発行済みシステムコールの位置に対するシステムコール挿入発行操作、発行済みシステムコールに対する削除操作、発行目盛り位置移動操作(複数のシステムコール発行がある場合)、システムコール種別変更操作、システムコール引数変更操作、システムコール操作対象位置移動等の編集機能が設けられている。

[0143]

[アプリケーション開発システムの処理手順]

そして、上述したアプリケーション開発システム20は、以下のように動作する。図31は、本実施形態に係るアプリケーション開発システム20の動作を示すフロー図である。

[0144]

先ず、最初に必要なデータとして、入力装置 5 7 から環境定義装置 3 1 に対し、環境定義データを入力する (S 1 0 1)。

[0145]

環境定義装置31に必要なデータが揃うと、入力装置57から環境定義装置31に対し、プログラミング装置32を起動する情報を入力する。入力を受け付けた環境定義装置31は、プログラミング装置32を起動する(S102)。この起動の際、プログラミング装置32のインタフェースであるGUI(Graphical User Interface)が、表示装置56に表示される。

[0146]

プログラミング装置32は、起動された後、入力装置57からプログラミング操作入力を待つ。ユーザーは、入力装置57を介してプログラミング操作によりプログラミングデータの入力を行う(S103)。

[0147]

次いで、入力されたプログラムについて、チェック部45によりプログラミング情報のチェックを行う(S104)。

[0148]

そして、チェックの結果がエラーであるか否かの判定を行い(S105)、エラーである場合にはエラー情報41を更新するとともに、そのエラーの内容について表示情報作成部48により表示情報を作成し、表示装置56において表示する。ステップS105において、エラーが発生していないと判断された場合には、プログラミング情報38及びオブジェクト情報39を保存する(S106及びS107)。

[0149]

その後、プログラミングを終了するか否かの選択を待ち(S108)、プログラミングを続行する場合には、ステップS103に戻り、再度プログラミングデータの入力を受け付ける。ステップS108において、プログラミングの終了を選択した場合には、テンプレートファイル生成部40においてテンプレートファイル42を生成し、出力するとともに(S110)、実行オブジェクト生成部46において、実行オブジェクトファイル47を生成し、出力し(S111)、作業を終了する(S112)。

[0150]

プログラミングデータの入力を受け付けてから、入力結果を表示するまでの処理手順を図32に示す。この処理手順に沿って、表示装置56に表示されているウインドウ70をインタフェースとするプログラミングを行う。

[0151]

次いで、発行されるシステムコールを、システムコール選択ペイン61で入力 装置7を通じて選択する(S201)。また、入力装置57を通じて、システム

3 1

コールが発行する位置を入力する(S202)。

[0152]

入力されたこれらのデータに基づいてシステムコール発行位置チェック部において、システムコール発行位置をチェックする(S203)。

[0153]

次いで、このチェック結果について判定を行い、エラーが発生していない場合には、発行システムコールの操作対象の選択が必要か否かの選択を要求する(S205)。捜査対象の選択が不要である場合には、RTOSカーネルチェック装置にて、発行システムコールカーネル部を処理する(S201)。

[0154]

ステップS205において発行システムコールの操作対象の選択が必要である場合には、入力装置57を介して、プログラミング操作システムコール操作外傷位置を入力する(S207)。

[0155]

システムコール操作対象位置チェック部36にて、システムコール操作対象位置をチェックする(S207)。このチェック結果の内容についてエラーが生じているか否かについて判定を行い(S208)、エラーが生じていない場合には、入力装置7によりプログラミング操作のシステムコール引数を入力し(S209)、RTOSカーネルチェック部37にて、発行システムコールカーネル部を処理する(S210)。

[0156]

ステップS210において発行システムコールカーネル部を処理した後、カーネル処理の内容を判定する(S211)。このステップS211においてエラーが発生していない場合には、プログラミング情報38の保存(S212)及びオブジェクト情報39の保存(S213)を行い、表示情報作成部48にて表示情報を作成し(S214)、作成結果を表示装置56において表示し(S215)、終了する。

[0157]

なお、ステップS204やS208、S211においてエラーが生じた場合に

は、エラー情報41を保存した後(S216)、このエラー情報を表示し(S2 15)、処理を終了する。

[0158]

[システムコール発行時の動作]

次いで、システムコール時の動作について説明する。ここでは、プログラミング作業ペイン63がタスク部になっていると仮定し、実行状態タスクである"\_usr3cd"がシステムコール"sta\_tsk"を発行し、休止状態タスクである"\_usr6cd"を起動する追加操作を例に説明する。図33は、システムコール時における表示装置56に表示された画面構成を示す説明図である。

[0159]

まず、前述したシステムコール選択ペイン61から、発行するシステムコールを選択する。この選択操作時、システムコール選択チェック部50が、プログラミング作業ペイン63をタスク部に仮定している場合は、タスク部から発行可能なシステムコールを選択可能にし、ハンドラ部に仮定している場合は、ハンドラ種別により、そのハンドラから発行可能なシステムコールが選択可能となるように、ユーザのシステムコール選択操作を監視している。

[0160]

本実施形態では、プログラミング作業ペイン63がタスク部と仮定しているため、システムコールペイン61からハンドラ部からのみ発行可能なシステムコールを選択することはできない。

[0161]

入力装置 7 から、システムコール選択ペイン 6 1 より "sta\_tsk"を選択する。選択後、プログラミング作業ペイン 6 3 において、入力装置 5 7 からシステムコール発行操作を行う。この時点において、システムコールを発行するメモリ位置は、発行済みシステムコールが存在しないため「0」であり、メモリ位置:0における実行状態タスクは"\_usr3cd"であるため、"\_usr3cd"タスクのシーケンスライン 6 4 上付近(シーケンスライン上付近とは、対象シーケンスラインの上、あるいは下のシーケンスラインから対象シーケンスラインに近い位置までとする)システムコール発行位置 9 1 を入力装置 7 から選択

する。

[0162]

この追加操作におけるシステムコール発行位置の選択は、先の説明の通り、目盛り間を開けてシステムコールを発行することを防ぐ機能が働く。機能は、図30のようにシステムコール発行選択位置91が指す場所を指定しなくても、目盛り位置:0以降、"\_usr3cd"のシーケンスライン64上付近を選択すれば、目盛り位置:0を選択したことになる。

[0163]

選択(入力)を受け付けたプログラミング装置32は、システムコール発行位置チェック装置35に、選択内容をチェックさせる。システムコール発行位置チェック装置35では、図34の処理手順によりチェックを行う。

[0164]

すなわち、図34に示すように、先ずシステムコール発行位置におけるオブジェクトの種別を判定し(S301)、"OK"であれば、システムコール発行位置におけるオブジェクトの状態について判断する(S302)。このステップS302において"OK"であるときは、戻り値「ret」に、システムコールが操作対象オブジェクトを必要とするか、しないかについての情報を与えて(S303)、処理を終了する。

[0165]

この戻り値「ret」は、システムコールが操作対象オブジェクトを必要とするか、いないかの情報と、エラー情報をセットするものである。本実施形態では、この戻り値「ret」は、32bit領域を持つ変数であり、最上位ビットにはシステムコールが操作対象オブジェクトを必要とするか、しないかの情報がセットされ、それ以外のビットにはエラー情報がセットされる領域に用いられている。

[0166]

ステップS301またはステップS302において"NG"と判断されたときには、戻り値「ret」に、エラー情報を与え、前記ステップS303を経て、処理を終了する。

[0167]

そして、このようにして得られた戻り値「ret」により、発行したシステムコールが"sta\_tsk"であり、プログラミング装置32は、システムコール発行位置チェック装置35が設定した、ret情報領域のチェック結果から、チェック判定にエラーが無いことと、"sta\_tsk"に操作対象オブジェクトを必要とすることが判明する。その操作対象タスクは"\_usr6cd"であるため、"\_usr6cd"タスクのシーケンスライン64上付近システムコール発行位置91 'を入力装置27から選択する。

#### [0168]

もし、システムコール発行位置91が図33と違う場所、例えば、周期起動ハンドラオブジェクトである" cyc\_Hdrl"のシーケンスライン64付近をシステムコール発行位置として選択した場合には、システムコール発行位置チェック装置35では、RTOS仕様から"sta\_tsk"発行位置オブジェクトとして不適と判断し、ret情報領域にエラー情報を与える。

### [0169]

また、システムコール発行位置91以外のタスクオブジェクトのシーケンスライン64付近をシステムコール発行位置として選択した場合は、システムコール発行位置チェック装置35では、RTOS仕様からシステム発行タスクの状態不適(実行状態タスクではない)と判断し、ret情報領域にエラー情報を与える

#### [0170]

システムコール操作対象位置選択は、システムコール発行位置からマウス等の入力装置によるドラッグ操作で位置を選択する。この際に、先に述べた様に、システムコール操作対象位置は、システムコール発行位置と同一目盛り位置のシーケンスライン上付近を選択させる機能があり、その機能は、図33中の表示ライン93のように、システムコール発行位置からのドラッグ操作に、カーソルの縦方向移動にのみ線が追従描画され、その線の末端が選択位置となる様になっている。

#### [0171]

選択(入力)を受け付けたプログラミング装置32は、システムコール操作対

象位置チェック装置36に、選択内容をチェックさせる。システムコール操作対象位置チェック装置36では、図35の処理手順によりチェックを行う。

### [0172]

すなわち、図35に示すように、先ず、システムコール操作対象位置のシステムコール操作対象位置におけるオブジェクトの種別を判定し(S401)、ここにおいて"OK"であれば、システムコール操作対象位置におけるオブジェクトの状態について判断する(S402)。このステップS402において"OK"であるときは、戻り値「ret」の最上位ビット領域をクリアしてその値を「O」とし(S403)、処理を終了する。

#### [0173]

ステップS301またはステップS302において"NG"と判断されたときには、戻り値「ret」に、エラー情報を与え、前記ステップS303を経て、処理を終了する。

#### [0174]

これらの処理により、この戻り値「ret」の最上位ビットにセットされたシステムコールが操作対象オブジェクトを必要とするかしないかの情報がクリアされ、それ以外のビットにはエラー情報がセットされることとなる。

#### [0175]

チェックにおいても、システムコール発行位置のチェックと同じく、システムコール操作対象位置91'が図33と違う場所、例えば、周期起動ハンドラオブジェクトである"cyc\_Hdrl"のシーケンスライン64付近をシステムコール操作対象位置として選択した場合は、システムコール操作対象位置チェック装置36では、RTOS仕様から"sta\_tsk"操作対象オブジェクトとして不適と判断し、ret情報領域にエラー情報を与える。

#### [0176]

また、システムコール操作対象オブジェクトが91'以外のタスクオブジェクトのシーケンスライン64付近をシステムコール操作対象位置として選択したが、選択したタスクが休止状態タスクでない場合は、システムコール操作対象位置チェック装置36では、RTOS仕様からシステムコール操作対象タスクの状態

不適と判断し、ret情報領域にエラー情報を与える。

[0177]

システムコール操作対象選択位置のチェックが終了し、エラーが無い場合は、発行したシステムコールが持つ機能の処理をRTOSカーネルチェック装置37にて行う。本実施例においては、休止状態である"\_usr6cd"を、実行可能状態にする。この処理におけるエラー判定基準は、RTOS仕様に基づく。

[0178]

システムコール発行の操作、そのチェック完了後、プログラミング装置32は、ウインドウ70に発行結果を追加描画するために、プログラミング情報38、オブジェクト情報39を更新し、表示情報作成装置48にて表示情報を作成し、表示装置6に、図36の様な描画更新されたウインドウ70が表示される。

[0179]

プログラミング情報38には、目盛り位置:0に発行されたシステムコールと、その発行内容が情報として保存される。

[0180]

オブジェクト情報39には、目盛り位置:0に発行されたシステムコールの影響により、オブジェクトがどの様に変化したか、変化したオブジェクト情報だけを更新する。

[0181]

オブジェクト情報39を利用し、プログラミング装置32は、オブジェクト情報内容39に変更がある/ないに関わらず、更新処理終了後、オブジェクト情報39から、次の目盛り位置における実行状態タスク情報を検出する。その情報を実行状態ナビゲートライン100として図36の様に、発行したシステムコールのシステムコール発行位置から次の目盛り位置まで線描画する。

[0182]

また、入力装置57のマウス等の操作ポイントを、プログラミング作業ペイン63内にある、発行済みシステムコールの描画を外し、あるオブジェクトが持つシーケンスライン64上付近に移動させると、操作ポイントが指したプログラム処理の流れの中において、そのオブジェクトの状態をウィンドウ70に表示させ

、参照することができる。

[0183]

プログラミング装置32起動後、入力装置57から入力した操作によって"sta\_tsk"発行のプログラミングが完了する。この装置を利用することにより、システムコール発行の内容を開発装置に実装されているチェック装置群45が、利用するRTOS仕様に従ったチェックと、RTOS管理下のオブジェクト操作を行うため、プログラミングの段階において、システムの不具合除去、不具合検知を行うことが可能となり、オブジェクト情報39の利用により、プログラミング段階において、タスクオブジェクトの状態遷移の表示、他アプリケーションシステムにおいて使用するオブジェクトの状態を表示することにより、プログラミングを強力にサポートすることができる。

[0184]

[イベント発生時の動作]

次いで、イベント発生時の動作について説明する。ここでは、アプリケーション開発システム20において、図37の様なプログラミングを入力装置57から入力が行われた場合を例に説明する。図37は、本発明装置によるプログラミング中の状態である。

[0185]

本実施例では、開発アプリケーションシステムが稼働するハードウェアにおいて、ハードウェアの周期的な割り込み、非同期な割り込みイベントの発生時、その割り込みイベントに連動し処理される単位をプログラミングした場合に、プログラミングの段階において、その割り込みイベント発生のタイミングを定義し、アプリケーションプログラムが使用するタスクの振る舞い、およびオブジェクトの状態変化を検証する方法を示す。

[0186]

図37に示すように、タスク部プログラミング作用ペイン111では、タスク部のプログラミングが行われており、cyc\_Hdrlハンドラ部プログラミング作業ペイン112では、タスク独立部であるcyc\_Hdrlハンドラ内にプログラミングを、それぞれ別の作業ペインで行っている。

#### [0187]

タスク独立部は、ハードウェアの周期的な割り込み、非同期な割り込みイベン ト発生時の処理単位であり、タスク部のプログラミングと同期が取られていない

### [0188]

本実施形態では、図38の様に、アプリケーションプログラミング構築段階において、タスク独立部である周期起動ハンドラ部の処理単位をタスク部のプログラム中に仮想的に処理させる、割り込み発生イベントを発行することにより、ハードウェアの周期的な割り込み、非同期な割り込みイベントが発生した場合のシミュレーションを検証することができる。

#### [0189]

割り込み発生イベントを発行し、ハードウェアの周期的な割り込み、非同期な割り込みイベントの発生シミュレーションを検証するためには、まず、タスク部のプログラミング作業ペインにおいて、割り込みイベントを発生させたい目盛り位置に、割り込み発生イベントを発行する。入力装置57により割り込み発生イベント発行が行われ、入力を受け付けたプログラミング装置32は、システムコール発行時に行うチェックを同様に行う。チェック内容は、割り込み発生イベント発行位置のオブジェクト種別、オブジェクトの状態である。

#### [0190]

割り込みイベントを発生させるオブジェクトの状態は、環境定義装置31に対し、静的に定義するそのオブジェクトに必要なシステム環境定義と、そのオブジェクトの機能を有効/無効にする操作があり、その様な操作が必要な場合のみ入力装置57から、プログラミング装置32に対し、そのオブジェクトの動的な操作「システムコール発行」を行う。

#### [0191]

プログラミング装置32が、割り込み発生イベントの発行が正しいものであると判断した場合、図38の処理手順に従い、割り込み発生イベントを発行したハンドラ内のプログラミング処理をすべて行い、その処理の結果、オブジェクトの変化をオブジェクト情報39に保存し、タスク部の処理に戻ることになる。アプ

リケーションプログラムの処理イメージを、図40に示す。

[0192]

すなわち、ハンドラ内に行われたプログラムを処理するには、図39に示すように、先ずプログラミング情報38に保存されている、ハンドラ内の目盛り位置:0のプログラミング情報から、一つ一つ順番に読み込む(S501)。次いで、有効情報の有無を判断し(S502)、ハンドラ内のプログラミング情報が無い、あるいは有効情報をすべて処理し終えた場合には、オブジェクト情報39を保存し(S504)、終了する。

[0193]

ステップS502において、有効情報がある場合には、RTOSカーネルチェック部37にて、発行システムコールカーネル部を処理し(S503)、ステップS501以降の処理を繰り返す。

[0194]

この様な方法により、割り込みイベントを発生させたいオブジェクトの状態を操作し、オブジェクトの状態が割り込み発生できる状態であることをチェック群 4 5により判定された場合に、タスク部のプログラミング中に、同期がとれてないハンドラ部のプログラミング処理単位を割り込みイベントとして、一つのアプリケーションシステムの動作として表示することができるため、プログラミングの段階において、ハードウェアに発生する周期的な割り込み、非同期な割り込みを検証しながら、作業をすすめることができる。

[0195]

[時間待ち状態における動作]

次いで、時間待ち状態における動作について説明する。ここでは、アプリケーション開発システム20において、図40及び図41に示すようなプログラミングを入力装置7から入力が行われた場合を例に説明する。図40及び図41は、本発明装置によるプログラミング中の状態における画面操作を示す説明図である

[0196]

本実施形態では、開発アプリケーションシステムが稼働するハードウェアにお

いて、ハードウェアが実装している時間機能をRTOSが利用し、ある実行状態のタスクを時間待ち状態に遷移させ、プログラミングの段階において、その待ち時間の解除タイミングを定義し、アプリケーションプログラムが使用するタスクの振る舞い、及びオブジェクトの状態変化を検証する方法を示す。

[0197]

図41のタスク部プログラミング作業ペイン111では、目盛り位置:1において、"dly\_tsk" (タスク遅延)システムコールが発行されている。 "dly\_tsk"を発行した実行タスク"\_usr3cd"は、時間待ち状態へと遷移する。

[0198]

アプリケーションプログラムの実行環境から、時間待ち状態タスク\_usr3 cdの待ちを解除する方法は、"rel\_wai" [他タスクの待ち状態解除]を任意の目盛り位置で発行するか、"dly\_?tsk"発行時に指定した遅延時間の時間経過を待つことになる。"rel\_wai"を任意のタイミングで発行し、時間待ち状態を解除する方法は、システムコール発行時の動作で説明した機能により実現できる。

[0199]

もう一つの時間経過を待つ方法は、開発アプリケーションシステムが稼働する ハードウェアにおいて、ハードウェアが実装している時間機能を利用しているため、プログラミング段階において、動作を検証することができない。そこで、タ イムアウトイベントを任意のタイミングで、実行状態タスクから発行する。

[0200]

タイムアウトイベントの発行は、上述したシステムコールの発行方法と同じである。つまり、タイムアウトを発行するタスク側がシステムコール発行位置であり、操作の対象となるオブジェクトが、時間待ち状態タスクとなる。

[0201]

図41に示す例では、目盛り位置:1で時間待ち状態に遷移し、目盛り位置:9においてタイムアウトイベント131を発行し、"\_usr3cd"の時間待ち状態を解除している。実施例では、時間待ち状態を解除したことにより、タス

クオブジェクト状態が変化し、目盛り位置:10において、実行状態タスクが" \_usr3cd"になることが検証できている。

[0202]

以上、第3実施例を用いて説明したように、本発明によれば、プログラミング段階において、その実行環境の動作規則に従いアプリケーションシステムの振る舞いを視覚的に確認し、早期にプログラミングの不整合発見を行い、作業行程の戻りを低減させることにより、効率的なアプリケーションシステム開発を可能とすることができる。

[0203]

以上、本発明について、詳細に説明したが、本発明は本実施例に限定されず、本発明の主旨を逸脱しない範囲において、種々の改良や変更を成し得るであろう。例えば、本実施例では、イベントの最後(プログラムの処理終了時点)のタスクの状態に着目して不具合要因を解析する例を示したが、この着目するポイントはこれに限定されず、ユーザーは任意のポイントに着目して不具合要因の解析することができる。

[0204]

また、本実施例ではITRONに準拠したアプリケーション・プログラムを例に説明したが、本発明はこのようなリアルタイムOSに限定されず、一般にマルチタスク方式で動作するプログラムに広く適用できる。

[0205]

#### 【発明の効果】

本発明によれば、対話形式でユーザーから指摘された不具合箇所とプログラムの実行履歴情報から不具合要因とその解決策を特定し、更にこの解決策を反映させたプログラムの動作をユーザーに提示することができる。また、前記特定した不具合要因とその解決策から、該不具合を解決したプログラムを自動生成してユーザーに提示することができる。

[0206]

これらの結果、プログラムの不具合解析作業を容易にし、従来不具合解析に要していた時間を短縮することができ、プログラムの開発コストや開発期間などを

低減することができる。

#### [0207]

また、他の発明によれば、プログラミング段階において、その実行環境の動作 規則に従いアプリケーションシステムの振る舞いを視覚的に確認し、早期にプログラミングの不整合発見を行い、作業行程の戻りを低減させることにより、効率 的なアプリケーションシステム開発を可能とすることができる。

#### 【図面の簡単な説明】

#### 【図1】

本発明に係る情報処理装置の一実施例を示す概略図である。

#### 【図2】

本発明に係る情報処理装置に搭載される不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体の処理例を示す流れ図である。

#### 【図3】

本発明の情報処理装置が利用する検証データのフォーマット例を示す概略図である。

#### 【図4】

本発明の情報処理装置が利用する比較データのフォーマット例を示す概略図である。

#### 【図5】

本発明の情報処理装置が利用する判定結果データ1のフォーマット例を示す概略図である。

#### 【図6】

本発明の情報処理装置が利用する判定結果データ2のフォーマット例を示す概略図である。

#### 【図7】

本発明の情報処理装置が利用する不具合解決用質問データのフォーマット例を示す概略図である。

#### 【図8】

第1 実施例で想定したアプリケーション・プログラムの仕様に沿った動作状況

を示す入出力関連図である。

【図9】

第1 実施例で想定したアプリケーション・プログラムの不具合による動作状況 を示す入出力関連図である。

【図10】

図2で示した不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体の処理のうち、ユーザーインターフェース部の詳細な処理例を示す流れ図である。

【図11】

図10で示したプログラムの動作状況をユーザーに提示した表示例示すイメージ図である。

【図12】

図2で示した不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体の処理のうち、要求解析部の詳細な処理例を示す流れ図である。

【図13】

図10で示したプログラムの動作状況をユーザーに提示した表示例示すイメージ図である。

【図14】

図2で示した不具合解析プログラムを格納したコンピュータ読み取り可能な記憶媒体の処理のうち、タスク動作判定部の詳細な処理例を示す流れ図である。

【図15】

図10で示したプログラムの動作状況をユーザーに提示した表示例示すイメージ図である。

【図16】

本発明の情報処理装置が利用するシステムコール対応テーブルの一例を示す概略図である。

【図17】

第1 実施例における各種データの状態を示した図である。

【図18】

第1実施例における各種データの状態を示した図である。

【図19】

第2実施例で想定したアプリケーション・プログラムの仕様に沿った動作状況 を示す入出力関連図である。

【図20】

第1実施例で想定したアプリケーション・プログラムの不具合による動作状況 を示す入出力関連図である。

【図21】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図22】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図23】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図24】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図25】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図26】

第2実施例における各種データの状態を示した図である。

【図27】

第3実施形態におけるハードウェア資源の構成を示すブロック図である。

【図28】

第3実施形態におけるアプリケーションプログラム開発システムの全体構成を 示すブロック図である。

【図29】

第3実施形態に係るプログラミング装置32のGUIの画面構成を示す説明図である。

【図30】

第3実施形態に係るオブジェクト表示ペインの画面構成を示す説明図である。

【図31】

第3実施形態において、開発装置を利用しアプリケーションシステムを開発する流れを示すフロー図である。

【図32】

第3実施形態において、プログラミング装置32を利用し、システムコールを 発行した時の、開発装置の処理の流れを示すフロー図である。

【図33】

第3実施形態において、システムコールを発行する場合の画面操作を示す説明 図である。

【図34】

第3実施形態において、システムコール発行位置チェックの流れを示すフロー 図である。

【図35】

第3実施形態において、システムコール操作対象位置チェックの流れを示すフロー図である。

【図36】

第3 実施形態における実行状態ナビゲートラインの説明図である。

【図37】

第3実施形態におけるタスク部プログラミング作業ペインとハンドラ部プログ ラミング作業ペインの画面操作を示す説明図である。

【図38】

第3実施形態における割り込み発生イベントをプログラミング中に仮想定義する際の画面操作を示す説明図である。

【図39】

第3実施形態における割り込み発生イベント発行時の流れを示すフロー図である。

【図40】

第3実施形態における割り込み発生イベント定義時のアプリケーションプログラムの処理操作を示す説明図である。

#### 【図41】

第3実施形態において、時間経過をイベントとし、プログラミング中に仮想定 義する操作を示す説明図である。

#### 【図42】

従来のデバッガの構成を示した概略図である。

#### 【図43】

従来のデバッガが出力する実行履歴情報の構成を示した概略図である。

#### 【図44】

従来の実行履歴情報の構成とデータの一例を示したイメージ図である。

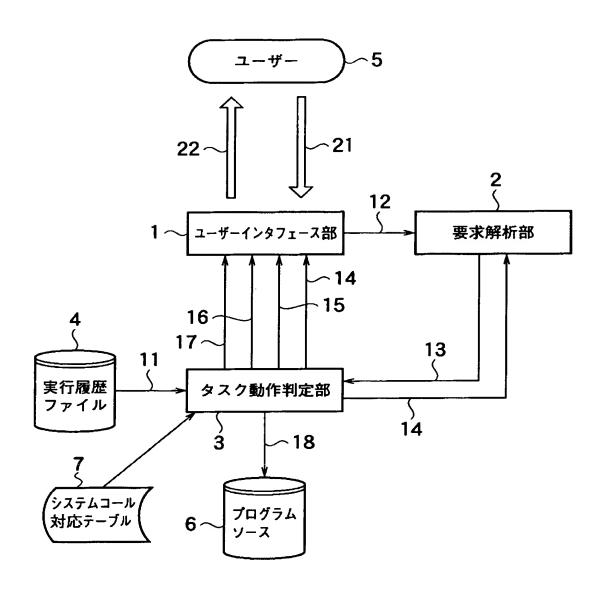
#### 【符号の説明】

- 1....ユーザーインタフェース部
- 2....要求解析部
- 3....タスク動作判定部
- 4....実行履歴ファイル
- 5....ユーザー
- 6....システムコール対応テーブル
- 11....実行履歴情報
- 12....入力データ
- 13....比較データ
- 14....検証データ
- 15....判定結果データ1
- 16....判定結果データ2
- 17....不具合質問用データ
- 18....プログラム
- 101....OS
- 102....デバッガ
- 51…中央処理装置
- 5 2 ··· R A M
- 5 3 ··· R O M

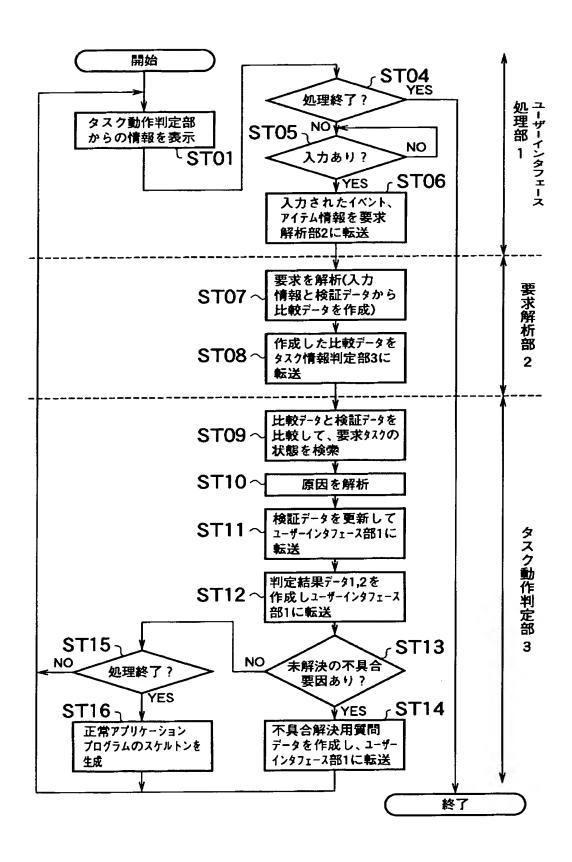
- 5 4 …通信装置
- 55…補助記憶装置
- 56…表示装置
- 57…入力装置
- 58…バス
- 59…出力装置
- 3 1 …環境定義部
- 32…プログラミング部
- 40…テンプレートファイル生成部
- 45…チェック部
- 46…実行オブジェクト生成部
- 4 8 …表示情報生成部

【書類名】 図面

【図1】



【図2】



# 【図3】

					11 17 12			P& 41.44
・下層	イベント順 (ジステムコールの) 2Xラ 発行) 発行) (ジステムコールの) ジスラ 発行)	発行 システムコール	発行元 タスクD	発行元タスク タスクの発行 優先度 後のタスク 状態		発行先9スク ID(発行先 資源)	発行先タスク 優先度 (発行先ID)	まれた タスクの発行 後のタスク 状態
イト画	イベント属性 (ディスパッチ)	イベント順 (ディスパッチ) タスクID タスク優先度 タスクID タスク優先度	ディスパッチ元 タスク優先度	ディスパッチ先 タスクID	ディスパッチ先 タスク優先度	1	-	ı
<u>-</u> چ	/ベント属 (割り込み // 処理) // // // // // // // // // // // // //	ハンドラ属性 (周期起動 ルバ、アーム ルド、割リ 込みルド)	ハンドラNo	1	ı	ı	I	ı
	•	•	•		•	•	•	
	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•

イベント属性:システムコールの発行 ディスパッチ割り込み処理

ハンドラ属性:周期起動ハンドラ アラームハンドラ 割込みハンドラ

# 【図4】

N	先イベント	後イベント	アイテム(タスク (y) )
	•		•
	4.75		

【図5】

①N	②要求タスク	③要求タスクの状態
:	:	:
:	:	:

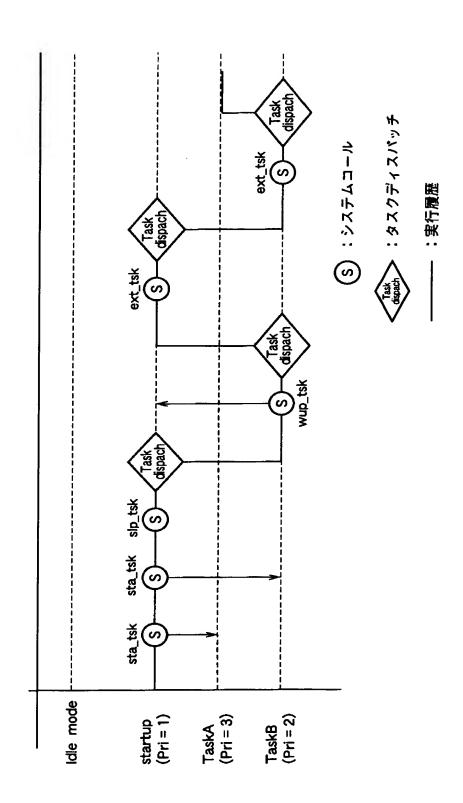
## 【図6】

① N	②イベントの最後に実行状態のタスク	③ ext_tsk
:	:	:
:	:	:

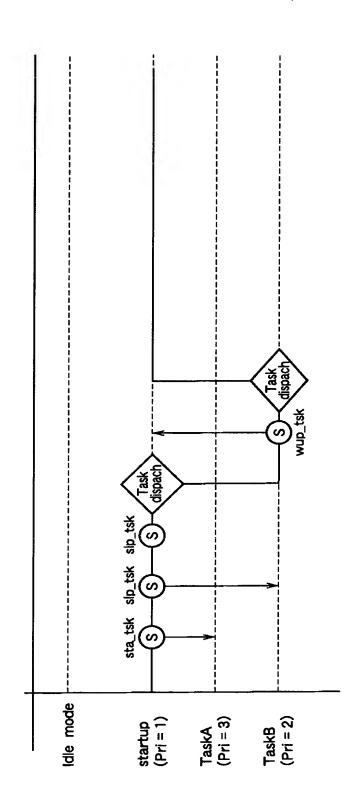
# 【図7】

①N	② 要求タスクを実行可能状態にする システムコールの発行対象	③ 要求タスクを実行可能状態にする システムコール
:	:	:
:	:	:

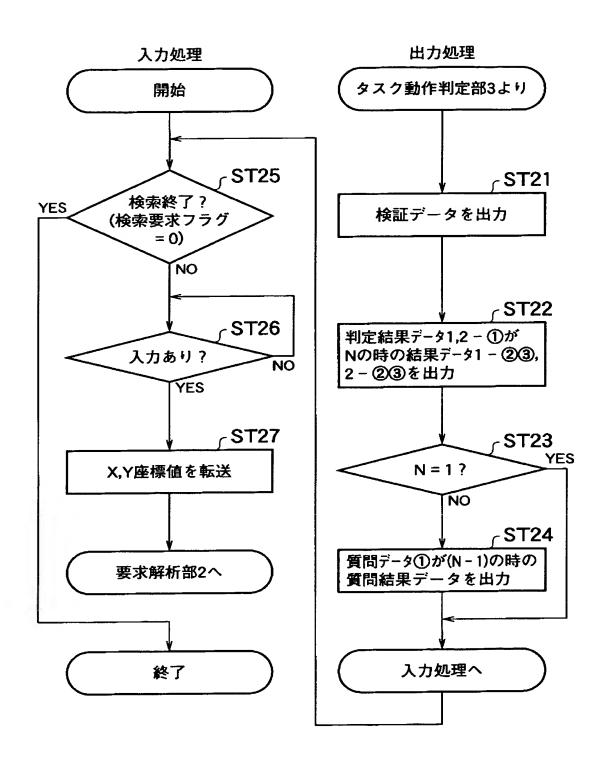
【図8】



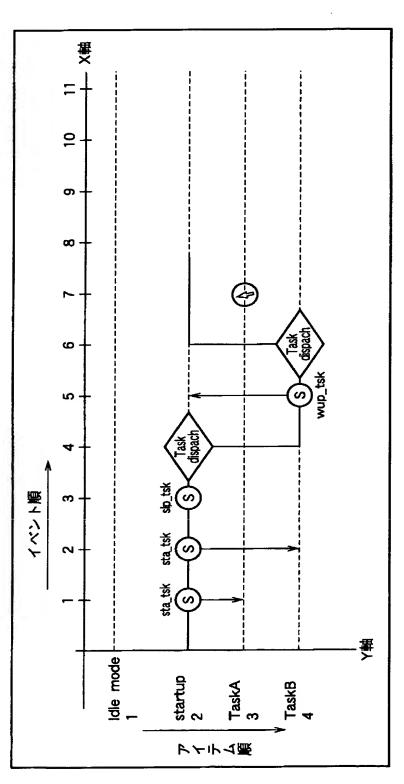
【図9】



【図10】



【図11】



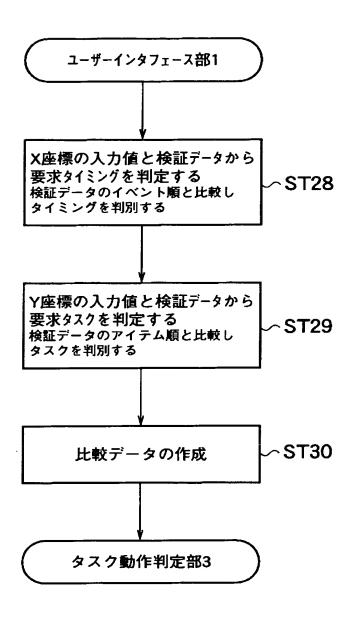
入力条件:実行履歴を表す線上しか指定できない (A):マウスカーソル

X座標 Y座標

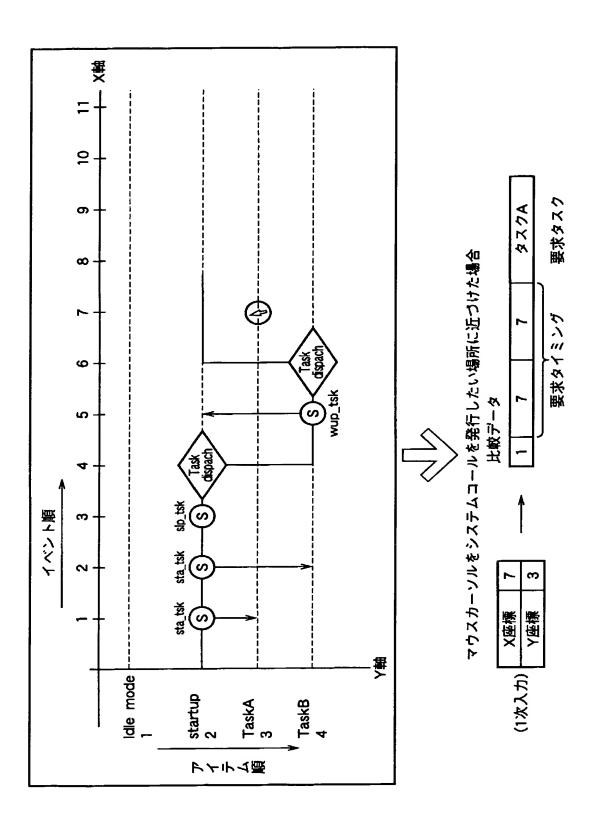
マウスカーソルをシステムコールを発行したい場所に近づける

8

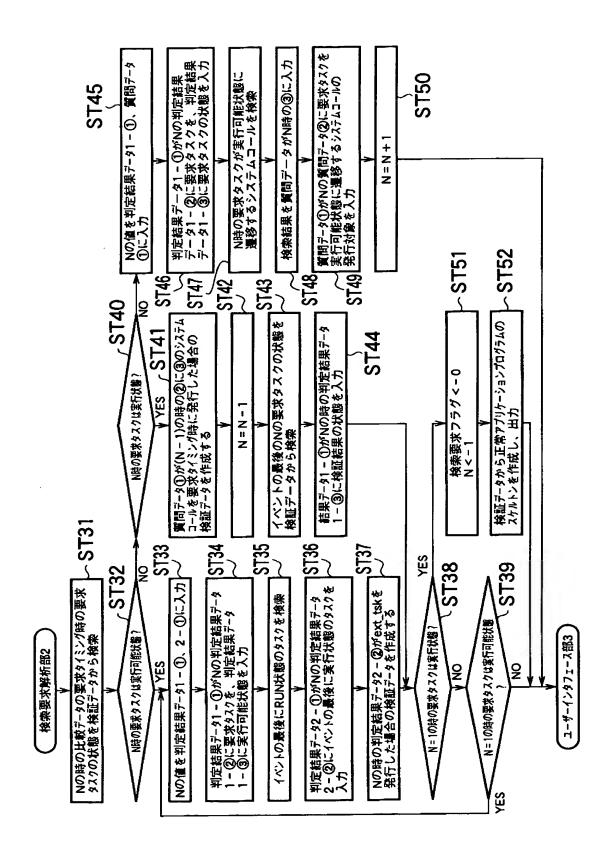
【図12】



【図13】



【図14】



【図15】

<システムコール対応テーブル>

No	システムコール	対応するシステムコール
1	sta_tsk	ext_tsk
2	slp_tsk	wup_tsk
3	wai_sem	sig_sem
•	•	:

## 【図16】

#### ●[処理1] → [第1次要求]

#### <検証データ>

イベント順	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ 属性	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	発行元 タスク 優先度	発行元タスクの 発行後のタスク 状態	発行先タスク ID(発行先 資源)	発行先タスク 優先度(発行 先ID)	発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行中	taskA	3	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行中	taskB	2	実行可能
3	System Call	slp_tsk	_	-	startup	1	待ち	1	-	1
4	Task Dispach	-	-	-	startup	1	1	taskB	2	実行中
5	System Call	wup_tsk	_	-	taskB	2	実行可能	startup	1	実行可能
6	Task Dispach		-	-	taskB	2	-	startup	1	実行中
	_									

#### <比較データ>

N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))	
1	7			*

### <判定結果データ1>

① N	② 要求 タスク	③ 要求 タスクの 状態
	-	

## <判定結果データ2>

①N	②イベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk

#### <不具合解決用質問データ>

①N	の要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール

## 【図17】

#### ● [処理2] → [処理終了]

#### <検証データ>

							_			
イベント順	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ 属性	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	発行元 タスク 優先度	発行後のタスク	発行先タスク ID(発行先 資源)	発行先タスク <del>優先</del> 度(発行 先ID)	発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	_	_	startup	1	実行中	taskA	3	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行中	taskB	2	実行可能
3	System Call	slp_tsk	_	-	startup	1	待ち	-	_	-
4	Task Dispach	-	-	-	startup	1	-	taskB	2	実行中
5	System Call	wup_tsk	-	-	taskB	2	実行中	startup	1	実行可能
6	Task Dispach	-	-		taskB	2	-	startup	1	実行中
7	System Call	ext_tsk			startup	1	休止	_	_	-
8	Task Dispach	-	-	-	startup	1	-	taskB	2	実行状態
9	System Call	ext_tsk			taskB	2	休止	-	-	-
10	Task Dispach	-	-	-	taskB	2	-	taskA	3	実行状態

#### <比較データ>

N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))
1	7	7	taskA

#### <判定結果データ1>

① N	② 要求 タスク	③ 要求 タスクの 状態	
1	taskA	実行可能	*
1	taskA	実行可能	*

## <不具合解決用質問データ>

① N	の要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール

### <判定結果データ2>

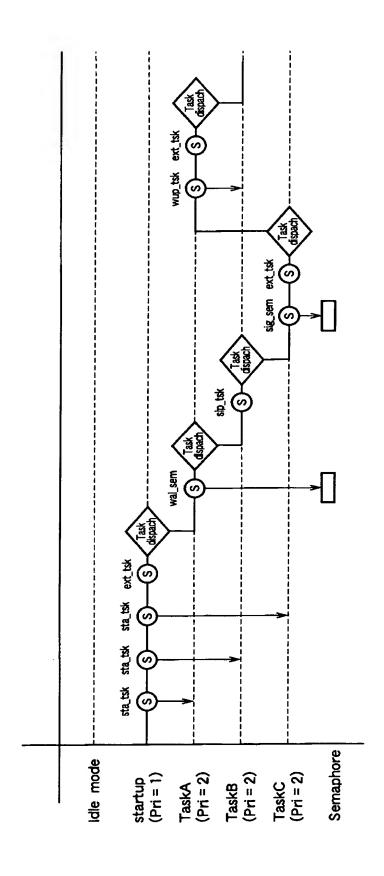
① N	のイベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk	
1	startup	ext_tsk	×
1	taskB	ext_tsk	*

【図18】

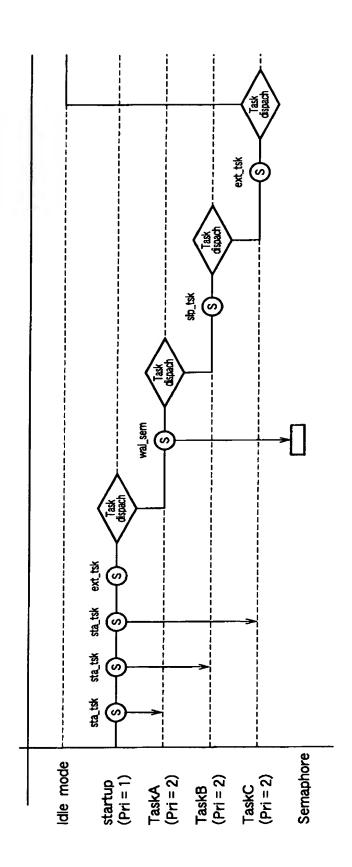
実施例1 正常アプリケーションのスケルトン例

```
File : sample.c
Data : 1999/11/11
   Developer: TOSHIBA
   Application Skeleton
#include "itron.h"
#define TASK_ID1
#define TASK_ID2
#define TASK_ID3
TASK startup():
TASK TaskA():
TASK TaskB():
TASK startup():
      ER ercd;
      ercd = sta_tsk(TASK_ID2,0);
       ercd = sta_tsk(TASK_ID3,0);
      ercd = slp_tsk();
      ext_tsk(); ----- (a)
}
TASK TaskA()
      for(;;){
}
TASK TaskB()
      ER ercd;
       ercd = wup_tsk(TASK_ID1);
       ext_tsk(); ----- (b)
}
```

【図19】



【図20】



# 【図21】

# ●[処理1] → [第1次要求]

#### <検証データ>

_				79.4= -	74 4° -	DC= 4740	AC# A 7 A	おにサムフル	DERAZAN
イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ 属性	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	タスク	発行後のタスク	ID(発行先	優先度(発行	光行光ブスクの 発行後のタスク 状態
System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
system Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
System Call	sta_tsk	-	_	startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
ystem Call	ext_tsk	-	-	startup	1	休止		1	-
Task Dispach	-	-	_	startup	1	1	taskA	2	実行状態
System Call	wai_sem	_	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	1
Task Dispach	-	-	_	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
ystem Cali	slp_tsk	-	-	taskB	2	待ち	-	_	-
ask Dispach	_	-	_	taskB	2	-	taskC	2	実行状態
ystem Call	ext_tsk	_	_	taskC	2	休止	-	-	_
Task Dispach	- 1	-	-	taskC	2	-	idle Mode	-	
	ASK 154  ystem Call ystem Call ystem Call ask Dispach ystem Call ask Dispach ystem Call ask Dispach ystem Call ystem Call ystem Call	MS性 ジステムコール ystem Call sta_tsk ystem Call sta_tsk ystem Call sta_tsk ystem Call ext_tsk ask Dispach - ystem Call wai_sem ask Dispach - ystem Call slp_tsk ask Dispach - ystem Call ext_tsk	展性 ジステムコール 属性 ystem Call sta_tsk ー ystem Call sta_tsk ー ystem Call sta_tsk ー ystem Call ext_tsk ー ask Dispach ー ystem Call wai_sem ー ask Dispach ー ystem Call slp_tsk ー ask Dispach ー ystem Call ext_tsk ー	属性 ジステムコール 属性 NO ystem Call sta_tsk ystem Call sta_tsk ystem Call sta_tsk ystem Call sta_tsk ystem Call ext_tsk ystem Call wai_sem ystem Call slp_tsk ystem Call slp_tsk ystem Call ext_tsk ystem Call slp_tsk ystem Call ext_tsk	属性 ジスプムコール 属性 NO ID  ystem Call sta_tsk startup  ystem Call sta_tsk startup  ystem Call sta_tsk startup  ystem Call ext_tsk startup  ask Dispach startup  ystem Call wai_sem taskA  ask Dispach taskB  ask Dispach taskB  ystem Call stp_tsk taskB  ystem Call ext_tsk taskC	A	1人   元子   元子   元子   元子   元子   元子   元子   元	A	ハア   ステムコール   原性   ハア   タスク   タスク   操動のタスク   MB   MB   MB   MB   MB   MB   MB   M

#### <比較データ>

N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))	
1	12	12	taskB	⋆
				l

#### <判定結果データ1>

① N	② 要求 <sup>タスク</sup>	③ 要求 タスクの 状態

### <判定結果データ2>

Фи	②イベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk

#### <不具合解決用質問データ>

① N	ク要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール

# 【図22】

#### ● [処理2] → [第2次要求]

#### <検証データ>

					発行元	発行元	発行を含えての	発行失タスク	発行先タスク	早行失タスクの
イベント順	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ 属性	ハンドラ NO	タスク ID	タスク 優先度	発行後のタスク 状態	D(発行先 資源)	優先度(発行 先ID)	発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
3	System Call	sta_tsk	_	-	startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
4	System Call	ext_tsk	_	-	startup	1	休止	_	-	-
5	Task Dispach	-	-	_	startup	1	-	taskA	2	実行状態
6	System Call	wai_sem	_	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	-
7	Task Dispach	_	-	-	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
8	System Call	slp_tsk	_	_	taskB	2	待ち	-	-	-
9	Task Dispach	_	_	-	taskB	2	_	taskC	2	実行状態
10	System Call	ext_tsk	_	-	taskC	2	休止	-	-	-
11	Task Dispach	_	_	-	taskC	2	-	idle Mode	ı	1
										L.,

#### <比較データ>

N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))	
1	12	12	taskB	
2	6	7	taskA	*

# <判定結果データ1>

① N	② 要求 タスク	③ 要求 タスクの 状態	
1	taskB	待ち	×

#### <判定結果データ2>

① N	②イベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk

#### <不具合解決用質問データ>

① N	②要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール	
1	taskA	wup_tsk	*

# 【図23】

#### ● [処理3] → [第3次要求]

#### <検証データ>

イベント順	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ 属性	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	タスク	発行元タスクの 発行後のタスク 状態	発行先タスク ID(発行先 資源)	発行先タスク 優先度(発行 先ID)	発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	_	-	startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
3	System Call	sta_tsk	_		startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
4	System Call	ext_tsk	-	_	startup	1	休止	1	1	-
5	Task Dispach	_	-	_	startup	1	1	taskA	2	実行状態
6	System Call	wai_sem	-	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	
7	Task Dispach	_	-	_	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
8	System Call	slp_tsk	-	-	taskB	2	待ち	1	-	-
9	Task Dispach	_	-	_	taskB	2	-	taskC	_	実行状態
10	System Call	ext_tsk	-	-	taskC	2	休止		1	-
11	Task Dispach	-	-	-	taskC	2	_	Idle Mode		

### <比較データ>

-30-70				
N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))	
1	12	12	taskB	
2	6	7	taskA	
3	9	10	taskC	*

#### <判定結果データ1>

①N	② 要求 <sup>タスク</sup>	③ 要求 タスクの 状態			
1	taskB	待ち			
2	taskA	待ち	*		

<不具合	<不具合解決用質問 <u>データ</u> >				
① N	<b>②要求タスクを</b> 実行可能にする システム コールの発行 対象	③要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール			
1	taskA	wup_tsk			
2	taskC	sig_sem	*		

① N	タイベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk

# 【図24】

### ●[処理4] → [第4次要求]

### <検証データ>

-TWALL /		1		T	79.65	74 C =	DC=4740	DER AZA	BEAAZA	カモチャフクの
イベント順	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ <b>属性</b>	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	発行元 タスク 優先度	第日大ダスクの 発行後のタスク 状態	発行先タスク ID(発行先 資源)	光行光タスク 優先度(発行 先ID)	発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
3	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
4	System Call	ext_tsk	-	-	startup	1	休止	-	-	-
5	Task Dispach	-	-	-	startup	1	•	taskA	2	実行状態
6	System Call	wai_sem	-	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	-
7	Task Dispact	-	-	-	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
8	System Call	slp_tsk	_	-	taskB	2	待ち	-		_
9	Task Dispach	-	_	-	taskB	2	-	taskC	2	実行状態
10	System Call	sig_sem	_	-	taskC	2	実行状態	Semaphore	1	_
11	System Call	ext_tsk	_	-	taskC	2	休止	-	-	-
12	Task Dispach	-	-	-	taskC	2	-	taskA	2	実行状態

#### <比較データ>

-50TM /				_
N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))	
1	12	12	taskB	
2	6	7	taskA	¥
3	9	10	taskC	l

#### <判定結果データ1>

ФN	② 要求 タスク	③ 要求 タスクの 状態	
1	taskB	待ち	
2	taskA	実行状態	¥
		_	

# <不具合解決用質問データ>

①N	②要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール	
1	taskA	wup_tsk	×
2	taskC	sig_sem	

Фи	タイベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk

# 【図25】

### ● [処理5] → [第5次要求]

#### <検証データ>

`1XWL /										
イベント順	イベント <b>属性</b>	発行 システムコール	ハンドラ <b>属性</b>	ハンドラ NO	発行元 タスク ID	発行元 タスク 優先度	発行元タスクの 発行後のタスク 状態	発行先タスク ID(発行先 資源)	発行先タスク <del>優先</del> 度(発行 先ID)	発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	-		startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
2	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
3	System Call	sta_tsk	_	-	startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
4	System Call	ext_tsk	-	-	startup	1	休止	-	-	1
5	Task Dispach	-	-	-	startup	1	-	taskA	2	実行状態
6	System Call	wai_sem	_	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	1
7	Task Dispach	-	-	-	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
8	System Call	sip_tsk	_	-	taskB	2	待ち	-	-	-
9	Task Dispach	-	-	-	taskB	2	-	taskC	2	実行状態
10	System Call	sig_sem	-	-	taskC	2	実行状態	Semaphore	1	-
11	System Call	ext_tsk	_	_	taskC	2	休止	-	-	-
12	Task Olspach	_	-	-	taskC	2	-	taskA	2	実行状態
13	System Call	wup_tsk	-	_	taskA	2	実行状態	taskB	2	実行可能
14	System Call	ext_tsk	-	-	taskA	2	休止			
15	Task Dispach	-	-	-	taskA	2	-	taskB	2	実行状態

#### <比較データ>

*XUTA / / *					
N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))		
1	12	12	taskB	1	
2	6	7	taskA	1	
3	9	10	taskC		
1	13	13	taskB	★	
2	11	12	taskA	l	

#### <判定結果データ1>

1772 10171					
② 要求 <sup>タスク</sup>	③ 要求 タスクの 状態				
taskB	実行状態	*			
taskA	実行状態				
	taskB	② 要求 タスク 大態 taskB 実行状態 taskA 実行状態			

#### <不具合解決用質問データ>

①N	の要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール
1	taskA	wup_tsk
_ 2	taskC	sig_sem

① N	② イベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk	
1	taskA	ext_tsk	⋆

# 【図26】

### ● [処理6] → [処理終了]

#### <検証データ>

~1X ALL /										
イベント <b>順</b>	イベント 属性	発行 システムコール	ハンドラ <b>属性</b>	ハンドラ NO	発行元 タスク ID		発行元タスクの 発行後のタスク 状態	ID(発行先		発行先タスクの 発行後のタスク 状態
1	System Call	sta_tsk	-	-	startup	1	実行状態	taskA	2	実行可能
2	System Call	sta_tsk	_	-	startup	1	実行状態	taskB	2	実行可能
3	System Call	sta_tsk	-	_	startup	1	実行状態	taskC	2	実行可能
4	System Call	ext_tsk	-	-	startup	1	休止	1	1	-
5	Task Dispach	-	-	-	startup	1	-	taskA	2	実行状態
6	System Call	wai_sem	-	-	taskA	2	待ち	Semaphore	1	
7	Task Dispach	-	-	_	taskA	2	-	taskB	2	実行状態
8	System Call	slp_tsk	_	-	taskB	2	待ち	-	-	_
9	Task Dispach	-	-	-	taskB	2	-	taskC	2	実行状態
10	System Call	sig_sem		_	taskC	2	実行状態	Semaphore	1	-
11	System Call	ext_tsk	-	_	taskC	2	休止	•	1	-
12	Task Dispach	-	-	-	taskC	2	-	taskA	2	実行状態
13	System Call	wup_tsk		-	taskA	2	実行状態	taskB	2	実行可能
14	System Call	ext_tsk	-	•	taskA	2	休止			
15	Task Dispach	_	-	1	taskA	2	_	taskB	2	実行状態

#### <比較データ>

N	先イベント	後イベント	アイテム (タスク (y))
1	12	12	taskB
2	6	7	taskA
3	9	10	taskC
1	13	13	taskB
2	6	7	taskA

#### <判定結果データ1>

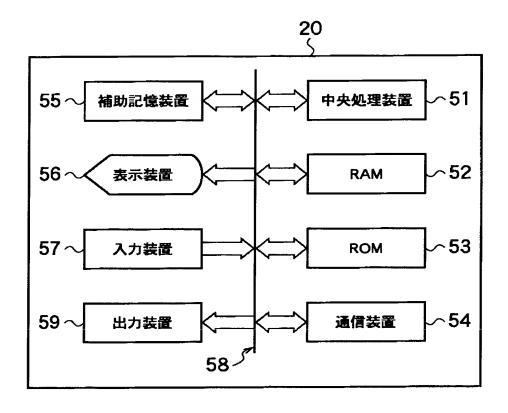
TIAL HINE PARTY					
① N	② 要求 タスク	③ 要求 タスクの 状態			
1		実行可能	*		
2	taskA	実行状態			

#### <不具合解決用質問データ>

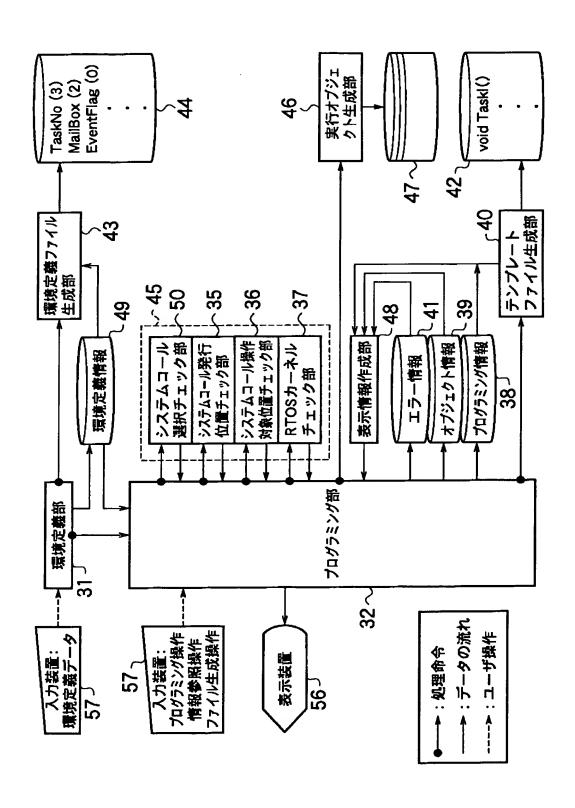
①N	②要求タスクを 実行可能にする システム コールの発行 対象	③ 要求 タスクを 実行可能 状態にする システムコール
1	taskA	wup_tsk
2	taskC	sig_sem

-13VC+0VK >					
① N	タイベントの 最後に実行 状態のタスク	③ ext_tsk			
1	taskA	ext_tsk			

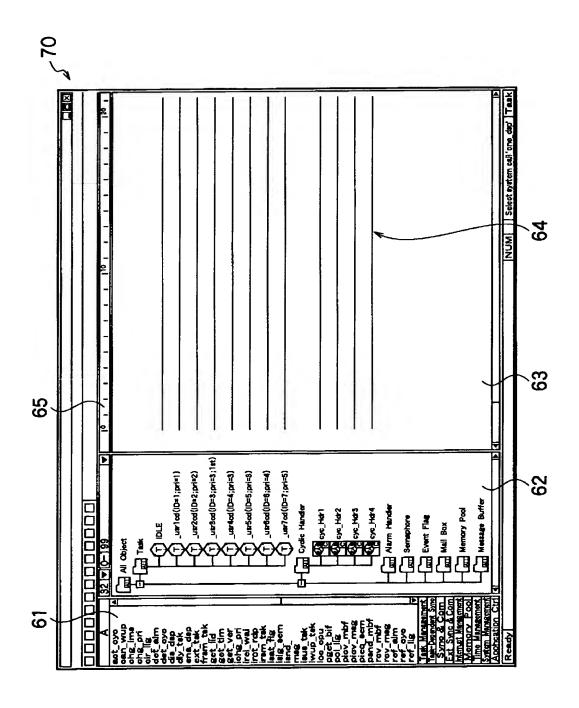
【図27】



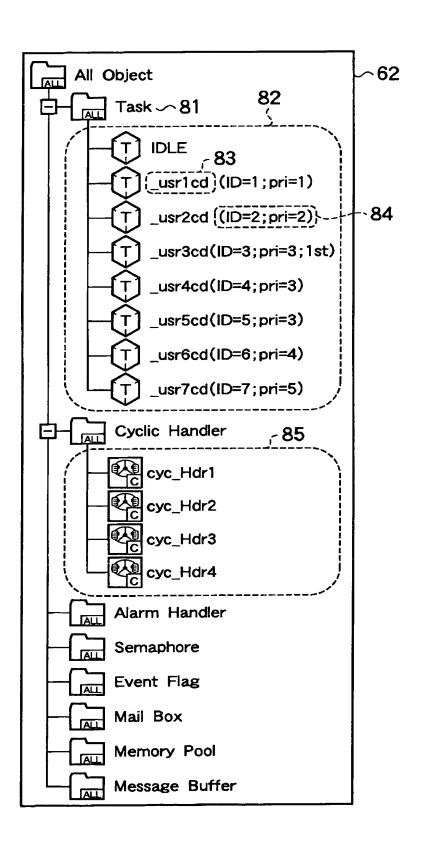
【図28】



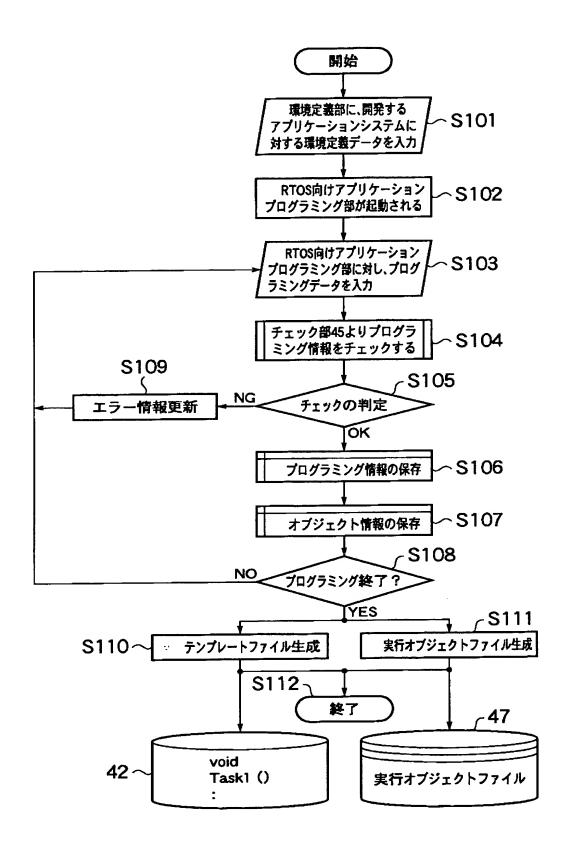
【図29】



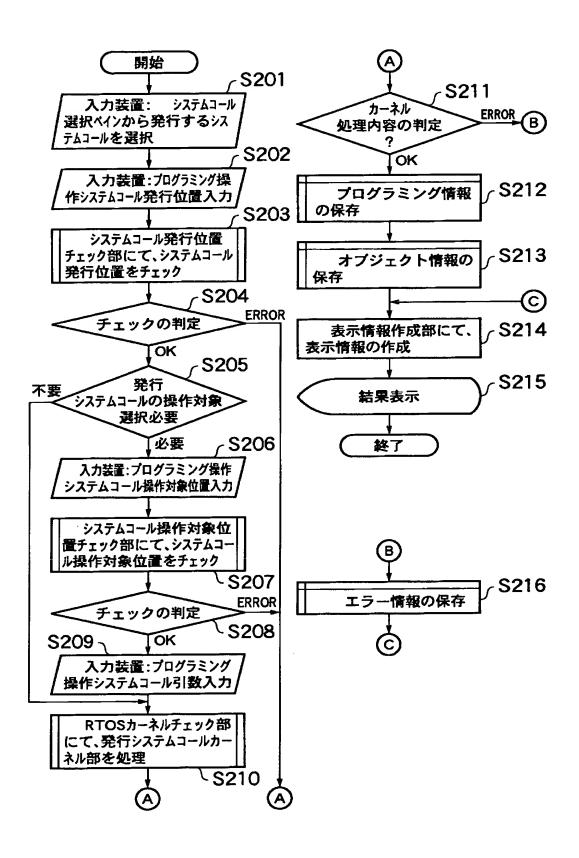
【図30】



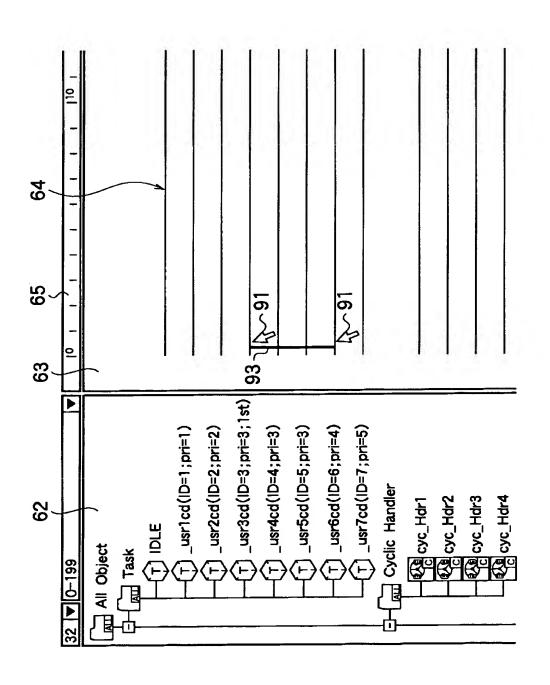
#### 【図31】



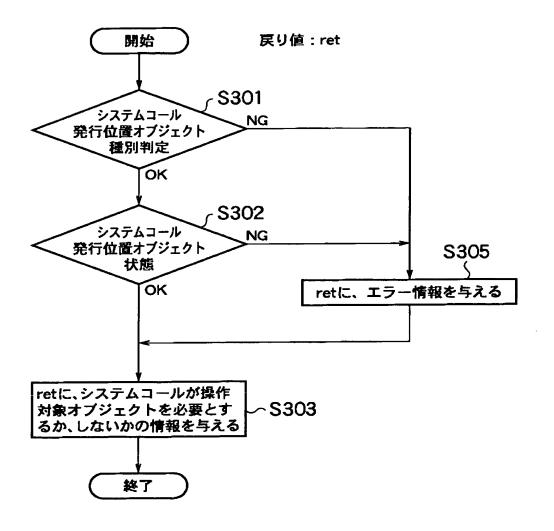
【図32】



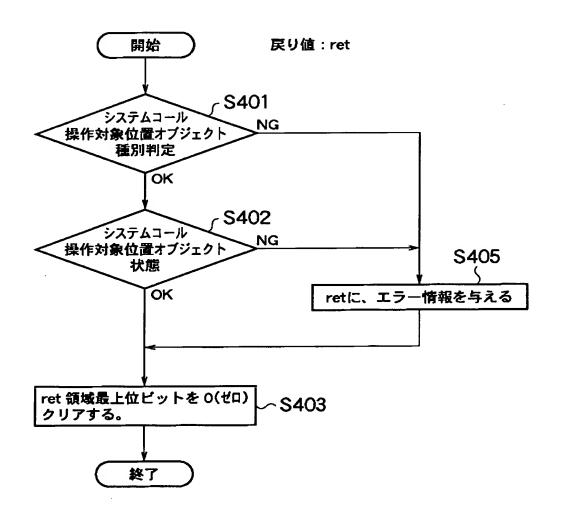
【図33】



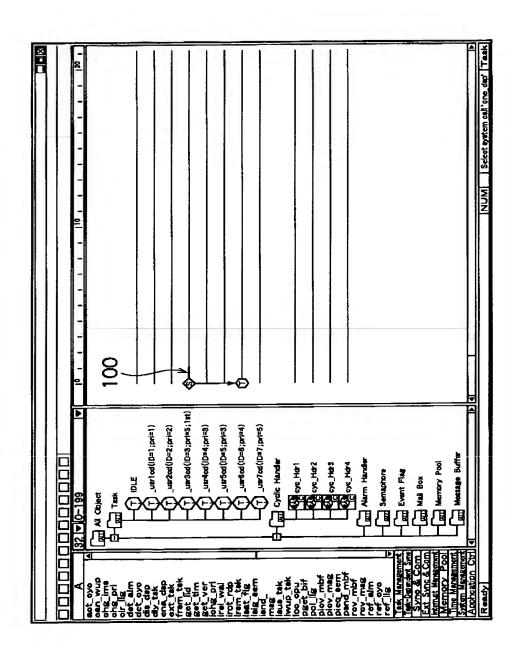
【図34】



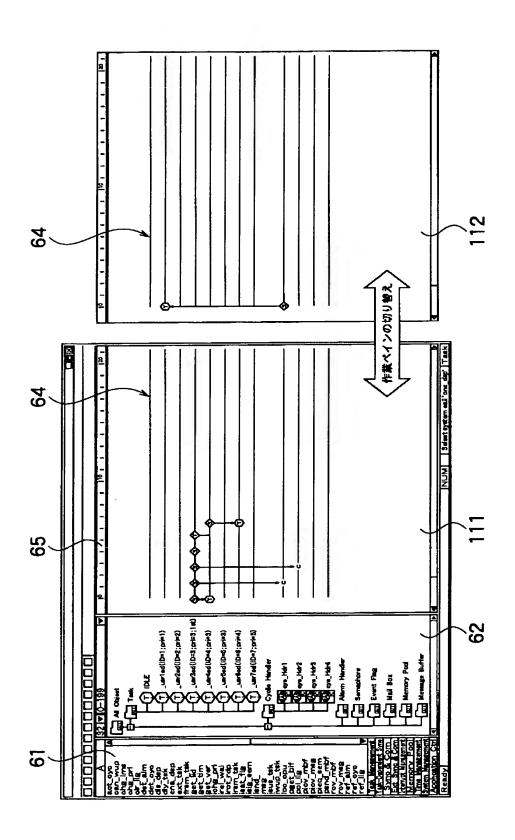
【図35】



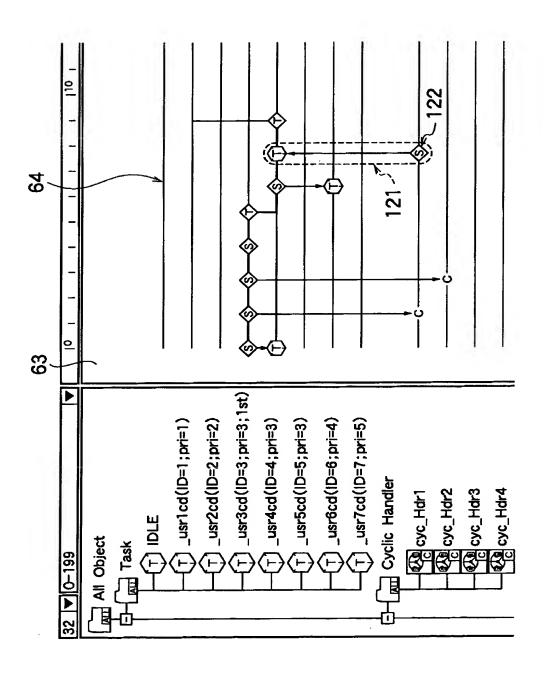
【図36】



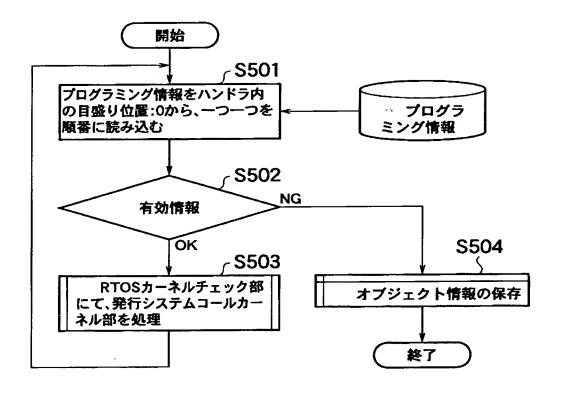
【図37】



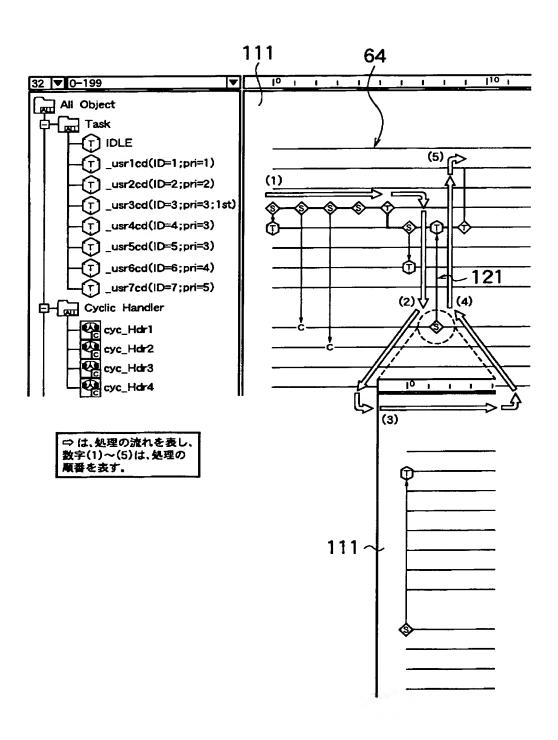
【図38】



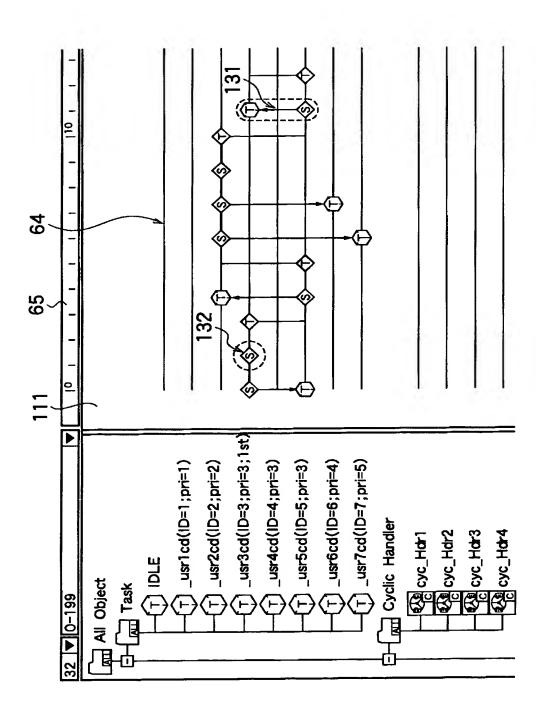
【図39】



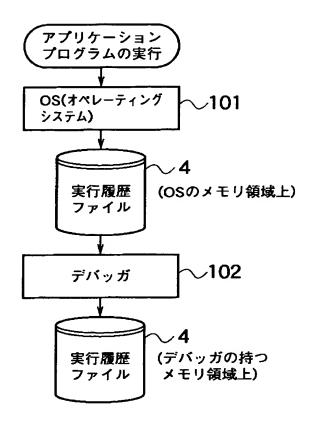
# 【図40】



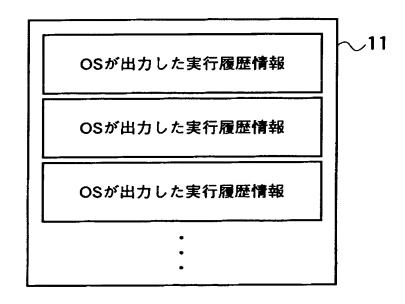
【図41】



### 【図42】



# 【図43】



【図44】

(a)

type oid	sysid	obj
----------	-------	-----

(b)

6	0	1		…(イ)
1	1	-9	2	…(□)
1	1	-9	3	(/\)
1	1	-17		···( <del>=</del> )
6	1	3		…(ホ)
1	3	-19	1	···( <b>^</b> )
6	3	1		···(
	•			
	•			
	•			

但し、

sysid: sta\_txt.... -9

: ext\_txt . . . -10

slp\_txt .... -17

: wup\_txt . . . . −19

とする。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 対話形式でユーザーから指摘された不具合箇所とプログラムの実行履 歴情報から不具合要因と解決策を特定し、これをユーザーに提示し、また、特定 した不具合要因と解決策から、該不具合を解決したプログラムを生成してユーザーに提示する。

【解決手段】 プログラムの実行履歴情報をもとに、該プログラムの動作状況を 時系列にユーザーに表示する表示手段と、表示された動作状況の中でユーザーが 不具合の箇所を指定するための入力手段と、前記入力手段によってユーザーから 指定された不具合の箇所と該プログラムの動作状況から該不具合要因を解析し、 この不具合要因を解決するための解決策を特定する動作解析手段と、を有し、前 記動作解析手段は、特定した解決策を反映させた前記動作状況を再作成し、前記 表示手段は、前記不具合要因と前記解決策と再作成した動作状況とをユーザーに 表示する。

【選択図】 図1

# 認定・付加情報

特許出願の番号

特願2000-396112

受付番号

50001684369

書類名

特許願

担当官

濱谷 よし子

1614

作成日

平成13年 1月12日

<認定情報・付加情報>

【特許出願人】

【識別番号】

598010562

【住所又は居所】

神奈川県川崎市幸区堀川町580番地

【氏名又は名称】

東芝エルエスアイシステムサポート株式会社

【特許出願人】

【識別番号】

000003078

【住所又は居所】

神奈川県川崎市幸区堀川町72番地

【氏名又は名称】

株式会社東芝

【代理人】

申請人

【識別番号】

100083806

【住所又は居所】

東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】

三好 秀和

【選任した代理人】

【識別番号】

100068342

【住所又は居所】

東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】

三好 保男

【選任した代理人】

【識別番号】

100100712

【住所又は居所】

東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】

岩▲崎▼ 幸邦

【選任した代理人】

【識別番号】

100100929

【住所又は居所】

東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】

川又 澄雄

次頁有

# 認定・付加情報(続き)

【選任した代理人】

【識別番号】 100108707

【住所又は居所】 東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第1ビ

ル9階三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】 中村 友之

【選任した代理人】

【識別番号】 100095500

【住所又は居所】 東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】 伊藤 正和

【選任した代理人】

【識別番号】 100101247

【住所又は居所】 東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】 高橋 俊一

【選任した代理人】

【識別番号】 100098327

【住所又は居所】 東京都港区虎ノ門1丁目2番3号 虎ノ門第一ビ

ル9階 三好内外国特許事務所

【氏名又は名称】 高松 俊雄

# 出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

(598010562)

1. 変更年月日 1998年 1月23日

[変更理由]

新規登録

住 所

神奈川県川崎市幸区堀川町580番地

氏 名

東芝エルエスアイシステムサポート株式会社

# 出願人履歴情報

識別番号

[000003078]

1. 変更年月日

1990年 8月22日

[変更理由]

新規登録

住 所

神奈川県川崎市幸区堀川町72番地

氏 名

株式会社東芝